
壁一枚の防衛線

福山 裕和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壁一枚の防衛線

【Nコード】

N0116R

【作者名】

福山 裕和

【あらすじ】

一枚の壁で東西に分かれた日本

東は超能力、西は超科学

東に住む中学三年生『一般人』茂木友孝はある少女との出会いから様々な事件に巻き込まれていく

1話 人生最長の登校（前書き）

この物語はフィクションです

登場人物名、地名、事件等は現実のものとは一切関係ありません

1話 人生最長の登校

『超能力』少なくとも60年前まではゲーム・漫画など架空の世界に登場する単語であった。

ある一人の赤子が車のおもちゃを浮かして遊ぶ動画がネット上に投稿された。

動画のタイトルは「ファーストコンタクター最初の超能力者」

もちろん、初めは信じる者など一人もいなかった。

しかし動画が公開されてから1ヶ月足らずで

局地的且つ不特定多数の地域でそのような事例いくつもが報告されるようになった。

おそらくテレビ・新聞、あらゆるメディアはこぞってそれを取りあげたにちがいない。

「超能力が今日、現実になった」と

だが、多くの科学者はこれを否定した

「常識ではありえない トリックだ」と

科学者は能力を科学で証明しようとしたが証明できた者はいなかったという

全人類約64億人の常識はたった数十人の赤子たちによって覆された。

超能力は現実になり幾人もの科学者が超能力の研究を始めた。

それから20年ほどで保護者達は子供に能力を競わせ、

人生すらも能力で決まる。

そんな時代が来た。

だが能力が芽生えない者、能力を信じない者

だがそんな社会に不満を感じる者などいくらでもいた。

いつしか能力者の周りには能力者しかいなくなり、

『常識の街』と『能力の街』ができた。

常識の街に能力者はいない、同じように能力の街に普通の人間はいない

超能力は人の住む場所すらも変えたのだ。

5月3日午前7..10 自宅

「俺は朝が苦手だ。」

茂木はトイレの中でつぶやく。

いつもなら二度寝コースだったのだが、今日は三大欲求である睡眠欲よりも尿意の方が勝った。

そのため、二階の自室からトイレのある一回に降りてくる羽目になったのだ。

「もう春だってのに、今朝はずいぶん冷えるな。」

トイレで用をたした後、時間的に二度寝をするわけにもいかず、

茂木はそのままトイレからリビングに直行する。

そこで茂木が今日初めて聞いた人間の声は付けっぱしのテレビから発せられた声だった。

「これを見れば現代の日本の情勢丸わかり！ 『日本勢力図』は今夜9時からです。」

昨日からかれこれ20回ほど見ていてもういい加減見たくないなー、と思っていたCMに挨拶を食らうとは・・・

茂木はそんな事を考えながらテーブルの上の朝食（調理済み）を温める。

レンジの前で50秒待ちテーブルまで運んで手早く済ます。

続けて洗顔、トイレの格闘を終えて制服に着替える。

まあいつもの流れ作業だ。

そんな流れ作業を終え、気づくともうテレビ左上のデジタル時計は7:40を示していた。

いつもはこのホームアローン状態を最大限に利用してネットサーフなどをしているのだが、

「今日は珍しく早く行こう」なんて思考が芽生えたので茂木は通学カバンの中身を確認して家を出た。

同日午前7:45 通学路

茂木は本日芽生えたミラクル思考を家から出てたった5分足らずで後悔することとなった。

「いつもよりたった5分早く出るだけで通勤ラッシュにぶち当たるなんて。」

茂木は口の中でつぶやく

茂木の住む地区は日本で唯一、Ω型という特殊な形をしている。

何でも昔、日本政府が『東西問題』の収拾にいろいろな策を講じたがことごとく失敗に終わり、

挙句に取った策が、当時『常識の街』と『能力の街』の境目にあつた壁をつなぎ合わせた

『第二次フォッサマグナ』で日本を完全に分断するというものだっ

た。

その際、なぜだか壁が大きく湾曲し、この街は『常識の街』、つまり西側の日本に包囲された形となっている。

壁際は住宅地、街の中心に近づくにつれて娯楽施設やショッピングモールなどの商業エリア

中央部には学校、病院、役所・・・そして東西管理局がある。

必然的にドーナツ化現象が起こり、施設へのアクセスも公共機関を使わなければならないのだが

壁際の安全性は絶対なので住民からの苦情もない。

・・・で問題はここから。

茂木の自宅は商業エリアと中心部の間にある。

当然のことながら中央に近づくほど道は通勤、通学者で混雑する。

茂木友孝は人混みは苦手である。もぎともたか

今の人口密度は2.5人／?位だ。

ここは中心へ向かう人が最も利用する歩行者専用道路だから、

この人混みが改善されるわけもない、むしろ混雑するはずだ・・・

とにかく一刻も早く抜けなければ、とは言ったものの空を飛べるわ

けでもなければ空間転送もできない・・・

「よし、とりあえず違う道に行こう」と考え付いたのは一分後だった
「この道路と平行な道に自動車メインで作られた道路がある。そこなら人もきつとしない」

何とまあ単純な考えであったことか

この先の十字路からまた込むので適当な私道から目的地に向かう事にした

人混みの中をかきわけるように道路の中央から端へ移動し私道に飛び込むように移動する

私道は嵐が過ぎた後のように学生の朝食やら何やらが散乱していた
商業エリアの人の一日はこの掃除から始まるんだなあと思うとなんだか申し訳なくなる

・・・とそんな事を考えている場合ではない。遅刻は何があっても厳禁なのでとっとと抜けよう

茂木は道を乗り換えるタイムロスの事を考えて走り出す

店と店との間を抜け、掃除をする店員に会釈をしながら走り、いつも御用達のゲーム店

その店の壁と隣の本屋との間幅2m、長さ約20mの暗がり进行を走り抜け・・・

ゴンツッ

視界が開けた時、目の前が真っ暗になる

ぶつかった感触からして壁とかではない、おそらく人だ

この店、結構使うから店員に目をつけられるのは嫌だ

あっても隣の本屋の人かも知れない

「すみません。大丈夫ですか？」

茂木はぶつけてスースーする涙目をなんとか開けてぶつかった人（であろうもの）にコンタクトを試みる

「イエッ こちらこそ。大丈夫ですか？」

聞こえてきたのは、元気で活発そうな女の子の声だった

少女は金色の長髪にエメラルドのような緑の瞳であった

制服を見るからに茂木と同じ中学の女子生徒、顔は見たことがない（と思う）ので多分下の学年だ

「本当にごめんなさい。いつもはこんな所から人なんか出てこない
のでつい・・・」

「制服が汚れたのなら後でクリーニング代を・・・」

できた子だ・・・と感心してしまう。俺より年下であるのは間違いない子が

こんなにも社交的にふるまえるなんて

「あの・・・聞いてます？」

座ったままの状態で少女が上目遣いで下からのぞきこんでくる
っていうか近い

「ええ と。大丈夫 夫で す」

どきまきして思わず言葉が継ぎ接ぎになってしまう

「なら良かったです♪」

少女は自分のことのようにホッと息をつき微笑む

「じゃあ私はこれで」

少女は立ちあがろうとするが何か違和感を覚えたのか顔を曇らす。

???

怪我でもしたんじゃないかと思い茂木は少女の顔から視点下にを動かす

だが、動かした視線の先に答えはあった

少女のもととスカートのすそがあったと思われる位置に、

スカートのウエスト部分が少女の左腰から右ひざにかけて斜めにずり落ちている

当然、下着も丸見えで・・・

なぜこんなことになったのかは分からないが

おそらく、茂木の黄金の左足がスカートを踏んづけているのに

少女が立ちあがろうとしたせいで、今のような状態なのだろう。

よし、状況を整理しよう。

茂木友孝の周りに、朝に向かいに来てくれる腐れ縁幼なじみ（暴力的なら完璧）、血の繋がっていない兄思いの妹

クラスのお堅い風紀委員（女子）、女子生徒会長の先輩 e t c

などのリア充要員はいない。

というか多分今日のこの子との会話で人生の女子との会話時間の半分は超えている。

ええと、つまり何が言いたいのかというと・・・

一般人の俺にこんなことが起きているのは何かの前触れに違いない
そうだ、こんなところで悲鳴をあげられでもしたら間違いなく誤解

される

だが少女はそんなことはしなかった。

「あのく足、除けてもらってもいいですか？」

静かに歌えかけるような声で発せられたその声は震えている用にも感じられた

「ハイッ スイマセン！」

音速で謝ってサッと足をどかす

少女はスカートの汚れをほろい、その間に茂木は立ち上がる。

だが少女は立ち上がらず、しょぼくれた様に両脚を地面につけたまま座り込んでいる。

一刻も早くこの空気をどうにかしたかった

『シカシドウシタモノカ・・・』

一刻も早くこの空気をどうにかしたかった

会って3分足らず、しかもパンチラを目撃してしまった年下の女の子に

「一緒に学校に行こう！」

なんて言えるはずもない。

キンコーンカーンコーン

中央の学校で一斉にチャイムが鳴り出し、遅刻5分前だということを告げる。

『助かった』というのが本音だった

しかし、走れば間に合わなくはない、だがお人よしの茂木はこの少女を放って行けるわけもない

「あの、良かったら・・・送りますか？」

学校は同じだから『送る』というわけでもないのだが・・・

少女は、ズーンというオーラを頭上に抱えたままだったが茂木の言葉にハッとしたりしく立ち上がる。

「えと・・・じゃあお願いします。」

少女は紅潮させたままの顔で、視線を茂木の子よりやや下に向けて言う。

茂木は少女に背を向けてしゃがみ、おんぶの姿勢を取る。

子供扱いされていると思ったのか、恥ずかしかったのか少女は少しためらった

・・・がすぐに茂木の背中に体を預ける

「じゃあ、しっかりつかまって。」

茂木は前を向いたまま少女に言う

少女は無言でコクリとうなづく

学生はおろか通勤中の会社員も車もない

茂木は縁石の外側に立つ

軽く地面を踏むとそこから幅30cmくらいのバチバチと電気を放つ青白いものすごく長い一枚板のようなレールが向かって伸びる。

次に右手からこれまた幅30cm位の長方形の先に三角形の付いたような形の板を出す。

その板をレールの上で放すと地面から1cm程の所で浮遊する

茂木は板に右足を乗せ

「じゃあ・・・行きます」

ひとり言のようように茂木はつぶやき、左足で地面を蹴り低空を飛行する

いつもより一人分重いボードで風を切りながら

教育エリアに向かって・・・

1話 人生最長の登校（後書き）

この小説を見つけて最後まで読んでくれた方ありがとうございます。
福山 裕和と申します。

まだまだ初心者ですが、たまに見かけることがあったら見てやって
ください

よろしく願います

2話 登校早々また喧嘩（前書き）

この物語はフィクションです

登場人物名、地名、事件等は現実のものと一切関係ありません

2話 登校早々また喧嘩

午前8…19

「では、わざわざありがとうございます」

少女はペコリとお辞儀をする

「いや、何というか・・・じゃあね」

一応、恩を売った形の茂木だが今朝の事が事だけにどう対応しているのかからない

少女は何もなかったかの様に、茂木に軽く会釈をして昇降口に向かう

昇降口は学年で別のため茂木は急いで靴を履き替え、

踵をつぶしたまま階段と廊下を全力疾走する

そしてゴールの教室で第一声を浴びせたのは、

「あっ、おっはよく茂木！」

磐郷俺いわざとの隣の席で3年連続で同じクラス、

テストではよく競い合う同じ頭脳レベルの腐れ縁だ

「ハア・・・ハア・・・おはよく 朝っぱらから元気だな、お前は」

「茂木くんこそ朝からそんなに汗だくで」

「しゃーねーだろ 全力疾走してきたんだから」

朝から能力を全開放した上そこから全力疾走したのだ

部活を引退してなまった体には相当ひびく

「そんなことより見た？今朝のCM！」

「ああ、あれだろ？『能力』についてやる今夜の特番！楽しみだよな」

後ろの席の藤間ふじまが話を聞きつけてやってくる

「やっぱり？楽しみだよな」

「あれって日本の情勢についてやる番組じゃないのか？」

茂木は二人に問う

「ああ、茂木最後まで見てないの？『東西問題』について何でもやる番組なんだよ」

藤間が茂木のに言う

「ってことは、今朝のは仕様が違うCMだったってことか？」

昨日から20回以上見ているCMだ、内容はしっかり覚えているから

磐郷の朝という言葉から今朝に途中から見たCMだろ

「最後までって・・・お前らどうやって学校に来たんだ？」

この二人は茂木より家は外縁部にあり

直線距離でも学校から20kmは離れている

電車を使えば話は別だが、この二人は電車は使わないから

今朝の7..20分頃のCMを見ていたのであれば間に合うはずがない

「親に頼んだんだ、二人まとめて」

磐郷は自慢げに言う

「助かったよ磐郷よかったな便利な親で」

藤間は便利を強調して磐里に皮肉

磐郷は何気ない顔で藤間をにらみ返す

この場合何気ない顔だから『見つめ返す』の方が正しいのかもしれない

だがそんな俺たちの何げない会話は途中でドオンという爆音でかき消される事となった

「また喧嘩か？」

「誰だよ？ まったく」

「見ろよ生徒会長が止めに入ったぞ」

「ムリムリあの人『フェイズ進度』 高くないし」

「えっ そうなの？」

教室が随分ざわめきだした

『フェイズ進度』 (Phase)

管理局が決めた文字通り能力の進行度合を示す基準

各段階の分類については一切非公開であり

能力者は第零〜第伍段階に分けられており数字が大きいほど優秀であるとされている

しかし『第伍段階』に進んでいるものは能力が発見されてから60年たった現段階でも居なく

6千万人いる能力者のうち5千9百万人近くが『サイドフェイズ第参段階』よりも下というのが現状である

「はあ、よく毎日やってて飽きないよな？」

この学校は市内でも不良で有名な中学校で、今やこの戦争のような喧嘩も完全に日常と化している

「いいんじゃない？校庭にクレーターの一つでもできれば体育もつぶれるし」

「アイツ等なんかの能力にそんな威力はないだろ」

茂木は即座に藤間の意見を否定する

この社会で重要視されているのは学力ではなくあくまで『進度』である

進学、就職までもが今は『進度』を見ており

それがあれば、学力など一般常識がある程度あれば通用してしまうのだ

優等生、エリート、高学歴などの単語は上級能力者のことを指す言葉へと変化しつつある

つまり不良⇨低能力者⇨落ちこぼれ

フォースフェイス

『第肆段階』である茂木は普通の人たちからは好奇の目にさらされ、落ちこぼれからは目の敵にされているというわけである

「夢がないよな茂木君は」

「夢とかそういう話じゃないだろ、藤間」

おそらく今日も全校集会は確定だなというどうでもいい予想を立てる
おまけに夏休みに登校日が設けられるという噂まで広まっているく
らいだ

「俺らも観てくる？」

磐郷が面白半分で誘ってきた

「いゝわゝさあゝとゝ」

さっきまでにこやかな笑みを浮かべていた磐郷の表情が一気に凍り
つく

生徒からは若いということもあって人気が高いその教師は

毛先まで手入れの行きとどいた燃えるような赤髪を腰のあたりまで
伸ばし、

就活用のスーツを着ていつもとは違う様子でゴゴオというオーラを
出して立っていた

脊徒卿子 せいできょうし 3－1の担任だ

「お前なくどうせ喧嘩に参加したいだけだろ？」

脊徒は怒り半分、呆れ半分といった様子で磐郷に言う

「せっ先生？ やだなくボクは喧嘩なんてしませんよおっつかいつの間に？」

磐郷の声色の変わり具合は実に愉快なもので

無理に作った笑顔も無駄な抵抗でありこの後の展開は目に見えていた

「とぼけるのか？ いい度胸だねえ1、2年の時は散々面倒見てやったのに」

脊徒の怒りと呆れの比率は怒りが勝ったようで両手の拳を回転させながら磐郷の頭を挟み込む

磐郷の作り笑いにの表情にも涙が浮かび始める

「センセーそんなんじゃない目標の30までに結婚できませんよお」

すかさず担任がガスツと手刀をたたきこむ

「ふっぐおツツ？」

もはや体罰とかそういう次元ではなくもはやただのコントにしか見え
ない

「なあ茂木、この人だけここに居るっておかしくないか？」

茂木は藤間の言っている意味が一瞬理解できなかった

担任が自分の教室に居るということが当たり前ではないか？

それとも単に興味がなかっただけかもしれないのだが

「何で？」

藤間も茂木の反応が理解できなかったようだ

「教師は校庭の喧嘩を止めに行ってるだろ？」

「さっすが、2人ともカンがいいわね」

こちらの話を聞きつけたのか担任がこちらに向かってくる

「カンがいいも何も話をそらしたのは先生のh・・・」

担任は無感情で本日二度目の手刀を後頭部にたたきこむ

「あなたたちにあの喧嘩を止めてほしいの！ 拒否権はないわよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

2、3秒の間沈黙が続いた

クラスの全員が一斉に話を止めた時のような、そんな沈黙だ

「じゃあ先生、今日は全校集会なしでお願いできますか？」

この空気をどうかしなればととりあえず茂木は今日の回避優先事項、第1位の項目を挙げた

「それは私じゃなくて校長先生が決めることだからゴメンね♪」

「先生！その手の事は茂木一人で十分だと思います」

藤間はどこぞの軍隊のように敬礼しながら言う

「言っておくけど拒否権はないからね？」

茂木に続いた磐郷に念を押すかのように脊徒は冷たくにこやかな笑みを浮かべた

午前9…03

昇降口から出て右側の校庭はいつもとは全くの別物になっていた

といっても地形が大きく変わっているとかでは無く、ただ見慣れない光景が起こっているというだけだ

激戦区と思われる中央付近は土煙が上がっていて良く見えないが、赤や青の光が時々瞬いて火球や電撃が飛び交っているのが分かる

教師たちは動けなくなった生徒を運ぶので手いっぱいなようで

実質、止めに入っている生徒や教師はいない

そう言えば生徒会長はどこに行ったのやら・・・

「去年まではただ全力でぶつかって自然消滅って感じだったんだけど今年はココを使ってるんだよ」

頭を指さして磐郷が言う

「頭脳派ってことか？」

なぜ磐郷が喧嘩事情に詳しいかは今は聞かないことにする

「リーダーがね」

「まさか消耗戦でもしてるってのか？喧嘩ごときで」

茂木は半ば呆れつつ磐郷に言う

もう1時間目の授業が始まっている時間なのに喧嘩の勢いはとどまることを知らない

受験生の授業時間の大切さが分からないのかアイツ等は

「・・・で、お前はどうしたんだ藤間？」

茂木はやる気のなさが見て取れる藤間に声をかける

「だってどう考えてもおかしいだろ俺ら関係ないし」

藤間の『俺ら』に茂木が入っているかは不明だ

ただ、自分は何となく駆り出されても仕方ない気がする」と茂木は感じている

・・・担任はあえて3人で行けと言い

3人も暗黙の了解でここにきている

「おい3人とも　速く行ってきて」

猫を被った甘い声で脊徒が呼びかけてくる

「何なんだよアイツ」

と磐郷

だが一番こういう時に反論したりすると後で大変なのだ

茂木は試合放棄状態の藤間と死亡フラグを立てた磐郷の肩をたたき
首を横に振る

その後、3人は互いに目を見あい

「了解しましたッッ」

そう言って勢いよく激戦区へ走り出した

2話 登校早々また喧嘩（後書き）

この小説を見つけて最後まで読んでくれた方ありがとうございます。
福山 裕和と申します。

まだまだ初心者ですが、たまに見かけることがあったら見てやって
ください

よろしく願います

3話 表と裏の戦い（前書き）

この物語はフィクションです

登場人物名、地名、事件等は現実のものと一切関係ありません

3話 表と裏の戦い

午前9…00 教室

「今日は朝から疲れた」

何というか肉体的にも、精神的にも

「どったの？ 零奈^{れいな}？ 今日是一段とお疲れだね」？

「そりゃ疲れるよ」

だって朝からあんなことがあつたんだもん

「なにに？ ひょっとして通学路でナンパされたとか？ そしてその先まで行ってあんな事やそんな事を」

「美咲^{みさ}、ちょっと声のボリューム下げよ？」

妄想に走る美咲に零奈は促す

「ゴメン、ゴメン凶星だと思わなくて☆」

美咲はさっきよりも声のボリュームを上げる

「ッ」

「ほら口が三角形になってるよ」

美咲は怜奈の頬をつまんでくるくると回す

「なっていないもん！」

「なってるって、そうやってすぐにすねちゃうから彼氏できないんだよ？」

『彼氏』という単語に反応したのか、カーツと顔が熱を帯びていくのが自分でも分かった

「ねえちよっと？ ホントに変だよ？ 大丈夫？」

「しっ知らないよ ホッホラッさっきから外でケンカしてるから気になっちゃって」

「ふーん？」

美咲は白いまなざしを向けてくる

「ホントだよぉ」

「分かったてゝ・・・ン？」

美咲が窓の外の方を向いたので、零奈も外を向く

「あれって茂木先輩じゃない？」

美咲が3年生の昇降口から出てきた数人の生徒を指さす

「誰？」

即答だった

「えー！？知らないのッ？あの『第肆段階』の茂木友孝先輩だよ？」

「えっと名前だけなら聞いたことあるかも・・・」

一般常識っポイので適当に相槌を入れる

「ほらッあの3人の真ん中にいる」

美咲は怜奈を椅子から引き離して窓際へ連れて行き一人の黒髪の男子生徒を指さす

見覚えのある顔だった、というよりほんの30分前に校門のところで別れた少年の顔がそこにあった

熱の冷めた顔にまた熱が戻り始めた

「やっぱり知ってるじゃん？」

零奈の顔が火照り始めたのに

「え？うッウン？」

なぜか最後が疑問形になってしまったが顔を隠すように下を向いて慌てて答える

「ゴメン、やっぱり疲れたから少し寝てくる」

「え？ うんお大事に」

零奈は小走りで席に戻りすぐうつぶせになって目を閉じた

午前9…05 校庭

「止めるつってもどうすればいいんだよ？」

流れ弾を交わしながら茂木は二人に問う

「全員片付ける」

さらっと藤間が言う

「壊れたな、藤間（汗）」

第参段階のこいつが壊れたら何をやらかわからない

と第肆段階の俺が言うのもおかしい話だが、

数字が一つ大きくなるだけで戦闘力はそれなりに変わるのだ

これから戦うのは第壱→第貳段階

壱と貳、参と肆の間に戦闘力的差はさほどないが

だが貳と参の間は雲泥の差だ

・・・で藤間が暴走したら向こうがどんなことになるかわかったものじゃない

「いざとなったらお前が止めろよ？茂木」

磐郷はニヤツと笑う

「簡単に言うなボケ」

そんな事を言っている間に藤間は一人で先駆する

茂木も藤間に続き、右手を前に突き出し自分の身長と同じくらいの電気の盾を前面に展開して前進する

サテライトスリンガー
『電刃事変』

電気を物質化することができる能力

物質化した電気の硬度は電気量に比例する

「茂木、どうすんの？」

藤間が後ろから叫ぶ

「藤間の言ってることにも一理あるだろ」

茂木は楽な方に逃げる

磐郷は一瞬顔を歪めたがこちらの方が楽なことに気付いたのか茂木と別な方に走り出す

茂木は電気の盾を電磁力による磁力操作で前の集団に射出する

厚さ数ミリのガラス盤のような盾は不良を次々となぎ倒し運動を止めて地面に倒れる

茂木は盾を引き戻さす様子をうかがう

予想通り、不良の側から多数の火球、電撃が放たれた

茂木はすかさず盾を展開し攻撃を防ぐ

「第三者は引っ込んでろ」という事らしい

しかしこちらでも事態を収拾しないと後で大変だ

次に、『テレキネシスト念動力者』や『ドーピング肉体強化』などの近距離型能力者が茂木めがけて突っ込んでくる

だが、ある一線に達したところでスタンガンのような音と共に地面からの落雷が彼らを襲った

さっき茂木が打ち出して放置されていた盾が待機電力を一気に放電しその一帯の不良を襲う

電気抵抗の熱で不良たちの不良たちの服を黒く焦がし、不良たちは

気を失って倒れる

「文字通り『地雷』って面白くもないな」

そう言うとき茂木は今持っている盾を人口密度が高そうな方に盾を射出する

さすがに2度目ということもあって、遠距離に対応できる能力者は盾を打ち落とそうとするが

盾は軌道を変えることもなく攻撃を正面から受け止めながら前進し、放電する

「なんだよこの無双ゲーは？」

面倒くさがってはいたものの、どうせやるなら

面白味があった方がいい、茂木はそう思いながら

流れ作業のようにまた盾を打ち出す

数分後、3人は不良を全員ひねりつぶし喧嘩は収拾した

午前9…42 職員室

喧嘩を収拾した3人は職員室のよく来賓客が座る部屋に通された

「ね、俺たちなるの？」

不安げな顔で藤間が尋ねる

「一番暴れた奴のどの口からそんなセリフが吐けるんだ？」

磐郷が半ばいらっとした口調で返す

本日、最も不良を病院送りにしたのは藤間なのだ

コイツはスイッチが入ると何をやらかすのやら予想もつかない

「とりあえず自宅謹慎とか・・・」

藤間はすっかりいつものテンションに戻っている

「大丈夫でしょ頼まれたのは俺たちなんだし」

茂木はきっぱりと言う

止めてやったのはこっちなのだ、別に罰を受けるようなこともないだろう

「うるさいわよ、3人」

脊徒がやってきた

目つきはかなり鋭く、その口から発せられた言葉は暗いオーラをまとっていた

「やだなあゝ先生？何をそんなに怒ってらっしゃるんです？」

磐郷が場の空気を和らげようと声色を変える

・・・が逆効果

「いゝわゝさゝと君？君、『KY』って言葉知ってるかしら？」

ギロリと磐郷をにらみつける脊徒

しかし、このままではいつものコントに持っていかれてしまう

茂木はすかさず脊徒に尋ねる

「先生、俺たちどうなるんですか？」

「3日間謹慎」

即答だった

だが脊徒の表情は磐郷をにらみつけていた表情のままだったので茂木は背筋が凍った

「そんなにゝビビらなくてもいいじゃない 謹慎って言っても学校は出席扱いにしてあげるから構わないでしょ？」

「じゃあなんで先生は不機嫌なんですか？」

磐郷が手を挙げて質問する

「書類よ、書類　こんなケース初めてだしいろいろと面倒なのよ」

「それって、俺たちの書類ですか？それとも・・・」

藤間が不安げな顔で質問する

「いいのよ、藤間君　別に頼んだのは学校側^{わたしたち}なんだし、私はあなた達の担任なのよ？　書類の数枚どうってことないわよ」

「でも保護者からクレームでも来たら・・・」

藤間がしつこく質問する

「ああいう輩はプライドが高いからどうせ病院でも適当に言い訳するでしょうよ　少なくともあなた達にやられたなんて言わないわ」

「先生・・・」

「いいから、有給休暇だと思って3日間楽しみなさい？　『自宅』
謹慎だなんて誰も言っていないわよ？」

「はい」

藤間は納得した様子でうなづく

「じゃあ先生俺たちもう帰っていいんですか」

と磐郷

「ええ、さようなら」

3人は荷物を取りに職員室を後にする

その後、脊徒は自分の教員机に向かう

そこには、本日病院送りになった生徒の書類が雑誌一冊分ほど山積みにされていた

これがこの貧乏学校のコピー用紙代を削ってまですることなのかと脊徒は思う

しかし、これだけの人数を相手にあの3人は戦ったのだ

自分は大人なのだ、あの3人に負けてなどいられない

脊徒はペンと訂正印をペンケースから取り出し喧嘩収拾の後半戦を開始した

4話 きっかけ（前書き）

この物語はフィクションです

登場人物名、地名、事件等は現実のものと一切関係ありません

4話 きっかけ

午後7…10 自宅

起きた時にはもうそんな時刻だった

茂木友孝は脊徒からプレゼントされた謹慎3・5日の0・3日ほどを完璧に無駄にした

「あ、でも午前中は楽しんだっけ」

ふと思い出し、つぶやく

午前中は磐郷たちと帰りに寄り道して、商業エリアでカラオケをして別れた

その後、こんな日には出会いでもあるのではないかと商業エリアをふらついて

冷静に考えれば今日、今ここにいる学生はそんなにいないという事に気が付くことに

そして、ファーストフード店で昼食を済ませたのだが

「そう言えばやたら店員とかの目が冷たかったけどサボタージュだと思われてたのか」

と、また一人つぶやく

しかし、磐郷たちと別れたのは失敗だった

正午に家に着いた途端、文字通りバッテリー切れで速攻で昼寝

そして現在に至る

明日もまたカラオケ屋で時間をつぶすことになっているし飯食って早く寝るか

あ、でもそう言えば今日ネットサーフしてなかったな

そう言えば今日は朝いつもより家を早く出て・・・

不意に回想した茂木の脳裏に今朝の少女の事がよぎる

まばゆい金髪にエメラルド色の瞳

回想補正かもしれないがなかなかレベルの高い子だった気がする

そう言えばパンツは純白のレース素ざ・・・

いかん、大変な事をしたのを忘れていた

どうして人は都合の悪いことを忘れようとするのだろうか

もし言いふらされたりでもしたら

茂木の頭に回想シーンが流れ出す

茂木をさげすむ友達、教師、親

今までの好奇の目とは全く違う視線が茂木を襲う

「ヤバイ、リアルにこれは、『人生終了のお知らせ』というヤツだ」
いや、学校で騒ぎになっていなかったし向こうもそんな話をまわりの人に話すような人には見えなかった

いやしかし、ラッキースケベなんてことを現実でやらかしたらどうなるか……

よし、忘れよう！

事故と言えはい

やるつもりはなかったんだと！

痴漢の冤罪とは違うんだ

上級能力者の言う事を信じないような奴がいるわけがないんだ

茂木はさっきの自分の思考を振り切ろうと脳内で独り言を始める

金髪と言えば別に髪染めた不良とかじゃなくて、髪の色は文字通り十人十色なんだよな

能力者が体内に持っている特殊な染色体のせいで西側に住んでいる普通の人間を

純粋な哺乳類－哺乳綱－霊長目－ヒト科－ヒト とするならば、東

側の超能力者は人間とは若干別の生き物ということになるらしい

その特徴が最も『見た目』に現れるのが、髪の色らしい

別にマンガみたいに炎Ⅱ赤髪みたいな単純な方程式は成り立つわけではなくて、ただの個性だ

東西分離前は俺のような黒髪が多かったらしいけど、今では東側には滅多に居ないそうだ

『黒髪の第肆段階』・・・だっけ？

この街で黒髪なのは俺だけなので、みんながそうやって俺の事を呼んでいたこともあった

街に出るたび好奇の目にさらされる、俺の軽い対人恐怖症は、この辺りが原因かもしれない

・・・そう言えばあの子、一言も口にしなかったな『黒髪』とか『第肆段階』とか

何だろう、もしかして一目惚れか？

まさか、そんなはずはないだろう

ただ自分と普通に接してくれたからうれしかったに違いない

「ってか、完全に元の位置まで戻ってんじゃねーか！」

忘れようとしたのに逆戻り、しかも一目惚れとか・・・

茂木は自分に呆れつつ、テレビの電源をつける

「そう言えば、『日本勢力図』だっけ？今日の9時からだよな」

茂木は時計を見る

時計は21..55を示していた

????????????

「冗談じゃねーよ」 結局0.5日ホントに全部無駄にしちまった
じゃねーか」

さっきの回想・脳内会話でそんなに時間を使ってだなんて

全く、相対性理論とは恐ろしいものだ

とりあえず、リモコンをいじくって例の番組のチャンネルにする

番組はクライマックスに差し掛かっている様で

司会者と思われる人物と誰かが会話をしていた

『誰か』、というのもその『誰か』は高さ2m程の曇りガラスの向
こうにいて男か女かもわからなかったからだ

画面の左上にはLIVEの文字、右上には「元・東西管理局員が裏
の事実を暴露!？」とテロップが出ていた

「では最後に皆さん？　なぜ戦争が東西間で起こらないと思います？」

『誰か』は曇りガラスの向こうから画面手前の観客席に質問を投げかける

ボイスチェンジャーのかかった声だったが観客側を向いたときの仕草、体系

機械出はごまかせない低い声などからおそらく男性だろうという見当がついた

「向こうは世界最高の超技術都市、我々超能力者なんてその気になれば簡単に潰せるんですよ」

会場の空気が一気に変わった

男性は真実だけを淡々と話す

「いや、失礼しました　こんな言い方ではいかにも西側が戦争を仕掛けようとしているようにしか聞こえませんか？」

「しかしね　向こうの科学力ならできるんですよ我々を滅ぼすことが」

茂木はテレビにすっかり見入ってしまった

残り5分とない一夜限りの特番に

「ですが、ご安心ください　向こうはそのようなことはできません」

「いや、矛盾ですよね　でも、本当なんです　向こうにはできない理由があります」

「それは」

その瞬間キーーーーーというノイズが走った

一瞬の出来事だった

画面の右上からオレンジ色の閃光が迸り男性の頭のシルエットに向かって進み

直撃した

男性の頭が吹き飛ぶのと首から噴水のごとく鮮血が吹き出すのが曇りガラスのシルエツト越しに窺えた

ガラスはすぐに男性の血でペンキを吹き付けた様に真っ赤に染まり

肉片は無造作に飛び散る

男性の足元から赤い水たまりが広がって床を汚す

客席も女性の悲鳴が聞こえ

文字通り地獄絵図だった

ほどなく映像が切り替わり放送は終了した

そして、ここから全てが始まった

5話 違和感と出撃（前書き）

この物語はフィクションです

登場人物名、地名、事件等は現実のものとは一切関係ありません

5話 違和感と出撃

5月4日午前5…30 自室

昨日の事件から早一日

茂木友孝は珍しく早く起きた

こんなに早く起きるのはラジオ体操をしていた小学生の時以来だろう

昨日テレビであんなことがあったのだ

嫌でも早く目が覚める

母親はもう起きているようで台所で炊事をする音が聞こえてくる

とにかく気を紛らわしたかった茂木は布団の誘惑など一瞬で引き裂いて1階に降りる

「おはよう友孝 今日はずいぶん早いみたいだけど？」

2日ぶりの母の元気な声は茂木を少し安心させた

「昨日メールしたでしょ？ 今日から3日間謹慎なんです」

「で？何か悪いことでもやらかしたの？」

母は、炊事の手を止める

「先生にケンカを止めてほしいって言われて止めたんだけど、なぜか謹慎って形で休みになった」

茂木は説明とする

「ふーん？ 大人って色々面倒なのね」

自分も大人だろと思うが

たしかによく考えてみれば昨日の事は結構後処理が面倒そうだ

学校側が生徒に頼み喧嘩で喧嘩で収拾

きつと止めに入った俺たちも、何らかの理由をこじつけて『謹慎』
ということになっているのだろう

「そう言えば母さん、昨日のテレビ見た？」

そう言った刹那、茂木はハッとした

失敗だった 朝の話題Ⅱ昨日のテレビ番組 なんて法則で話しかけて
してしまうなんて

しかもこの事を振り切りたくて布団から出てきたんじゃないかったのかよ？ 俺ッッ

再び炊事を始めた母の手がまた、ピタリと止まる

だが、母の口から飛び出たのは、意外な言葉だった

「え？ 日本何とかって言うやつ？ 職場で見たけどお母さんにはあまり関係のない事だったわ」

母の楽観的な態度に茂木は少しあ然とする

昨日の番組を『関係ない』と済ませることはできないはずだ

なぜなら番組を見た誰もが見たはずだ

一人の人間が殺されるのを・・・

「・・・それだけ？」

「それだけって？他に何かあった？」

母はキョトンとした様子でたずね返す

「だって、その打ち切りになったでしょ？終盤で・・・」

茂木は遠まわしに言う

「えっ？ 最後までやったでしょ？」

話がかみ合わない ひよっとしたら母の勘違いではないか？

茂木はすかさずテーブルの上のリモコンを取り、ニュース番組を片っぱしから観て回る

あれだけの事が起きたのだきつとどこかのチャンネルではとりあげられているはず・・・

だが全チャンネルを回しても、新聞の一面でも、得意のネットサーフでも

昨日の事件についての記事、書き込みなどは一切見つからなかった

茂木は思い出す昨日この番組を見ると言っていた若干2名の友人の事を

茂木はリビングに置きっぱなしだったケータイをテーブルの上から取る

しかし、現在時刻はまだ6:00を回ったばかり

こんな朝早くに男友達からモーニングコールとあっては、さすがに二人も迷惑だろう

そう思って茂木はすぐに連絡できるようメールの本文をあらかじめ打っておくことにした

『変だと思わないで答えてほしいんだけど

昨日の『日本勢力図』って最後どうなったの？

俺見逃しちゃって（――；）

』

母の事があるので控え目になった文章

だが分かる人にはこれで伝わるだろう

今日は8時に自宅（こゝ）に集合だから7時には起きてるだろう

茂木はメールを下書きフォルダに保存して

リビングのソファアの上に横になり

ダメ元で朝のニュース番組に目を通すことにした

午前7…10

藤間

『それって、最後の方？』

よく覚えてないけど僕的には

進度上がるような内容でもなかったし

1時間返せて感じ（笑）

』

磐郷

『朝からあまりその話はしたくない』

既に着替えと吐き気と戦いながらの朝食を終えた茂木は

午前7…00ジャストに一斉送信したメールの返事を読んでいた

しかし期待にこたえてくれたのは、一人だけだった

茂木は一人に『ありがとう』とだけ返信し

もう一人には、部屋を出て自室に向かう階段をのぼりながら電話をかけた

『はい、磐郷ですが？』

わざわざよそよしく出なくても・・・

「茂木だけど、お前、昨日の番組どうなったか覚えてんの？」

『覚えてんの？って、あんなことがあったんだから忘れるわけないだろ』

磐郷は若干声のトーンを下げ気味に言う

『ってか朝からその話はしたくないんだけど？』

「そのことを誰も覚えていないんだ！」

茂木は叫ぶように言う

『はあ？』

磐郷は声を裏返す

「お前今起きたのか？」

『いや、1時間前には起きてた』

『つーか覚えてないってどういうことだよ？ あんなことがあったら少なくとも騒ぎにはなるだろ？』

「でも無いんだよその話題が！ 新聞にもニュースにもネットにも
！」

「しかも、母さんに藤間まで！二人ともまるでなかったかのように！」

『少し落ち着いてくれ』

茂木は磐郷に促され声の大きさを下げる

『ゴメン、情報が少なすぎて状況が整理できてない』

「そう、悪かった」

『今日、8時にお前ん家だよな？俺早く行くからその時直接話そう』

「分かった それじゃ」

『ああ』

茂木はケータイを切ってポケットに入れる

そして考える

現時点での事を覚えているのは自分と磐郷のみ

何よりこの状況が茂木を不安にさせた

こんな時は、考えれば考えるほどマイナス思考が働いて

どんどん考えが悪い方向に行ってしまう

そんな時、

ドサッ

玄関の外、庭の方で何かが落ちるような音がした

もちろん『誰』が原因かは分かっている

茂木は玄関まで行きそいつがインターフォンを押すより早く戸を開ける

「早すぎだろ」

茂木は外には出ずに、玄関の中からつい5分前まで話していた友人に声をかける

磐郷は尻もちをついたような姿勢で茂木家の庭に落ちた様子だった

「イテテテ まったく、『送ってほしい』って言ったら話も聞かずに跳ばしやがってあのクソオヤジィー！」

磐郷とは独り文句を言う

磐郷の父親は第参段階で『空間転送』テレポート能力を持っている

この街全域をカバーできるだけの『転送可能域』と

対象物をピンポイントに移動させる実力を持っているらしい

ピンポイント転送の実力については

磐郷の落下地点がコンクリート上ではなく土の上だったことからも
窺える

昨日、磐郷たちが遅刻しなかったのもこのおかげだ

「お前に比べたら親御さんの方がよっぽど能力の使い勝手がいいと
思うぞ」

「でも、現にこっちは高さ2 m弱から落とされてるんだぞ？」

「帰ったら覚えとけよアイツめ」

最後にボソツと付け足す

どうせ、変な所に跳ばされるのが落ちなのだろうが・・・

「とりあえず上がってくれ」

いまだに玄関の中にいる茂木は磐郷に促す

「お邪魔しまゝす」

藤間は服の土ぼこりを払い茂木の玄関に足を踏み入れる

午前7…50 自室

「ほゝう？ 親はともかくとして、ネットにすらその話題が無いの

はおかしいな」

磐郷は茂木の自室のベットの椅子代わりに占領

茂木はキャスターに後ろ向きに座り話していた

「掲示板とかに覚えている人がいないか書き込んでみたら？」

と磐郷

「いやさすがにそんな書き込みをして管理局沙汰になったら元も子もないって」

と茂木

否定された磐里はベットに仰向けになる

かれこれこんなやり取りで10分以上使っている

「じゃあさ・・・」

突然、ベットから起きた磐郷がまじめな顔で切り出す

しかし、磐郷がこんな風な態度を取るのとは何か突拍子もないことを言う時

つまりボケる時だ

「管理局に直接行けばいいじゃん」

「はい？」

茂木は戸惑った

「ええと、その心は？」

「いや、これまじめな話」

磐郷は即答する

「だって、第参段階おれと第肆段階おまえが行くんだぜ？ 向こうだって悪戯だと思ったりしないだろ？」

「お前の第参段階サードフェイズは詐称だろ」

だが、その発想は無かった 確かに理想的だし確実だ

ネットにおかしな書き込みをして捕まるよりも遥かに良い

「下手したら精神科に連れて行かれるんじゃないか？」

茂木はフザケ半分の口調で返す

「上等だっつーのッ！」

磐郷は茂木に向かって親指を立てる

スツと肩から力が抜けたような気がした

自分にはこんなにも心強い仲間が自分に入るのだ

感じてないつもりだった不安から解放されたのだ

「でも、午前中は楽しまないと？」

茂木は窓の外を指す

藤間が家の前に自転車を止めているところだった

「そうだな」

磐郷も納得した様子でいた

「行くか」

「おう！」

茂木はキャスターから降り、磐郷もベットの反動を利用して立ち上がる

二人は、カラオケに行くには入り過ぎた気合を胸に

茂木の部屋を飛び出した

5話 違和感と出撃（後書き）

お久しぶりです

第一章を開始しました

設定やキャラはもうできているのですが

ストーリーを考えるのって難しいです^^;

これから応援してくれるとうれしいです

6話 延長戦（前書き）

この物語はフィクションです
登場人物名、地名、事件等は現実のものとは一切関係ありません

6話 延長戦

5月4日午前9…00 局立第五中学校

「納得できません！」

全校集会終了後、脊徒は廊下で一人の2年の女子生徒と対峙していた少女の後ろにもう一人いる気もするが対峙しているのは一人だけだ

「何で喧嘩を止めた先輩たちが謹慎なんです！」

七村美咲ななむらみさ 普段は適当そうでいて正義感の強い子だ

大人の事情であの三人を謹慎させてるのには抵抗を持ったがここま
で噛み付いてくる生徒がいるとは何んとも予想外だ

いや、むしろ七村なら食いついて当然か

「第一、向こうも文句言わなかったし むしろ喜んでたぞ？ それ
に何でそこまでする？」

脊徒は手に持った出席簿で肩をたたく

「気に入らないんですよ あんな低進度の不良なんかのためにあの
先輩方が授業を受けれないなんて！」

「それはふおっていだって同じなのよ」

あくび混じりに回答する脊徒

昨日の始末書を書くの夜中までかかり、そこからいつもの仕事
さすがに眠い

「なんですか先生その態度は！ だいたい・・・」

「分かった、分かった・・・で？ 結局あなたは何がしたいの」

七村はこういう時はすぐに熱くなる

ここは自分の感情を押し殺して大人の対応だ

「いや、それは、その・・・」

右斜め下を向いて黙る美咲

「何だ？ 理由もない突っかったのか？」

熱くなっているせいか顔が火照っている

「どうした？」

「先生には関係ありません！！」

「ハア！？」

仰天と苛立ちで脊徒は声を張り上げる

「いつ、いえ 言い方が悪かったです 申し訳ありません」

美咲は慌てた様子で後ろを向き後ろの少女を引き連れ去ろうとする

「おい、七村！」

脊徒の追撃ヴォイスに少女はビクッと反応し固まる

「な、何ですか？」

気が抜けてすっかりため口の七村

脊徒は一々その様な事を気にするような器をしていないので構わず進める

「いくら、進度重視社会だからとはいえ言葉は選んで話した方がいいぞ」

正義感の強さゆえの七村の発言、だが不良は百歩譲歩するとして東側の人間に低進度等と言われて気持ちの良い者はいない

「ハッはい気を付けます」

そう言ってまた振り返り歩き出す七村後ろの少女もそれに続く

それにしても何といっただろうかあの金髪の少女は

「ねえ美咲」

小走りに走る親友に少女は声をかける

「何だね？ 零奈君？」

美咲はすっかいいいつものテンションだった

「もうさっきまでいつもと様子が違ったからびっくりしたよ」

ほっと胸をなで下ろして零奈は告げる

「ただだって零奈がパンツ見られたって大声で言えるわけが・・・」

「もう既に大きいよ美咲」

人がいないので零奈は冷静につっこみを入れる

既に授業は開始しており彼女たちの通る廊下に生徒の姿はない

まったく何で話しちゃったんだろう「話せば楽になる」なんて言うておいて

話す前よりいろんな意味で疲れる

「ごめん」

美咲はしょぼんと下を向く

「しかも、先輩達の場所すらつかめなかったし」

「うう・・・ゴメン」

さっきよりも落ち込む美咲

これ以上へ込まれるとさすがに困る

「だって『茂木先輩に会いたいですけど』なんて言って勘違いされたら困るし」

もはやふて腐り気味の美咲

そうこうしているうちに教室に着いた

だが、教室で彼女たちを待っていたのは

「遅いぞ！ 七村ッ！ 黒沢ッ！」

赤い長髪にモデルのようなスタイルまだ眠そうな顔

そう、一時間目 数学の担当は脊徒卿子だ

「先生！？ さっきまで廊下で・・・」

驚きを隠せない美咲

「うん？ 誰が老化だって？」

「言ってません言ってませんッ！！」

「もういい おまえらは課外授業だ 廊下で景色でも見てこいー！！」

二人は気迫に押され言い返すまもなく教室から追い出される

「ったくなんなんだよあの人ッ」

訳がわからないといった様子で美咲は頭をかきむしる

「ねえ零奈アあんたなんでそんなに落ち着いてるのさア？」

「むしろ美咲は慌てすぎだよ　ホラ先生さっきなんて言った？」

「え？」

「『景色でも見てこい』だってよ」

零奈は教室の外を指さしニコリと笑う

その先には昨日で懲りなかったのか数名の生徒達が土煙を上げる

いつもの光景があった

6話 延長戦(後書き)

お久しぶりです

この度わたくし被災いたしましたorz

更新は遅くなると思いますがアイディアは温めてあります
そろそろバトルやりますなので是非ご期待ください

7話 再会（前書き）

この物語はフィクションです
登場人物名、地名、事件等は現実のものとは一切関係ありません

7話 再会

午後3…00

「なあゝ磐郷よ」

「なんだ？」

カラオケと昼食を終えた後、茂木と磐郷は藤間と別れ管理局を目指し歩いていた

本日ラッキー休暇中の二人の他に道路に学生らしい人の影はない

そんなこともあって二人に当たる視線はとても冷たく突き刺さる

まあ理由は他にもあるのだろうか…

「やっぱさあゝこんな時間に行くのやめない？」

茂木は告げる

一般人ですらこの態度なのでだ、管理局なら突き返されるても尚更だ

「大丈夫だって第^{オレ}参段階と第^{オマエ}肆段階が行くんだし」

「それを差し引いても明らかに学校の時間に行くのはまずくない？」

「しゃーないって窓口開いてるの四時までなんだから」

「銀行かよッ!？」

まあ確かにどうせメールフォームとかで問い合わせてもイタズラだと思われるだろうし

「にしても、お前、本当に人見知りだよな」

「幼少期のトラウマだよ、もはや対人恐怖症と言っても過言ではない……」

茂木はガクツと肩を落とす

「そう言うなよ黒髪くん♪」

慰めようとしてくれたのだろうが逆効果、茂木のテンションは下がる一方だ

「おい茂木くん！？ちょっと？」

磐郷は茂木を慰めようと必死にアプローチする

「ほらッ見たまえッ茂木くんッ！こんな時間にあんなにかわいい娘こがいるぞ？しかも二人組だ！」

あんまりうるさいので顔を上げる茂木

「ボク女性の方には興味がないんだけ！？！？」

茂木は体に電撃が走るのを感じた

それは茂木が電気系の能力者だからではない

茂木達の進行方向には昨日の金髪の少女がいたのだ

「お、おいどうしたよ？」

固まった茂木に声をかける磐郷

「あ、アレ」

茂木は前方を指差す

「うん？ 茂木くんもついに異性への興味が？」

「そうじゃなくて！」

「そうじゃなくて？」

首をかしげる磐郷

まてよ茂木友孝！ここで昨日の事を磐郷に話してみろこの先どんなことになるか

しかも、何？なぜ二人？

ああーそうかそう言うことなのか？

「ウチの生徒じゃん？」

答えになっていなかった

「ああ確かに…」

磐郷の反応は明らかに不審そうだった

「ってかアレ七村じゃ」

磐郷が発した名前がどちらのことを指しているのかわからず問い返す

「知らんのか？」

今度は磐郷が問い返す

何はともあれ話をそらすのには成功したようだ

「ってかあの金髪の娘誰だっけな？」

どうやら七村とは金髪の少女ではないらしい

「いや、そんなことより誰？七村って？」

茂木は再び問う

「成績優秀・スポーツ万能・容姿端麗生徒全員が隠れファンとまで言われている程の人気を誇るまさに学校のアイドルです」

ここまで説明するまで約5・6秒磐郷はとてつもなく早口で説明した

生徒全員が隠れファン以外は本当なのだろう

理由は今さら語るまでもない

どれ…ではその絵に描いたような『優等生』の姿を拝むとしますか

茂木は進行方向に視線を戻す

「あの…ちよつとよろしいですか？」

後ろから突然声をかけられ茂木は振り向く

そこには見覚えのある金髪の少女を引き連れた一人の少女がいた

さっきは顔までは見えなかったが磐郷の説明から受けたお堅い印象ではなく

本当に『アイドル』といったような健康的で活発そうな娘だ

…と観察はこれまでにしよう

事態は何一つ改善されていないのだ

ここは、向こうに先手を切らせて適当に合わせれば…

「えっと…今日はお話があつて来たんですけど…」

この授業時間に彼女達がどのようにしてここにいるのかなど茂木に考える余裕はない

「あっ自己紹介がまだでした 私、七村美咲っています」

茂木の返答を待たず七村は自己紹介を始める

「好きな食べ物はドリア好きな色は水色　B・W・Hは：　ってなに言わせてるんですかぁ？」

ご丁寧にノリツツコミまで御披露してくださった

「ちょっと私、先輩に話してるんですけど」

七村は腰に手を当てて茂木の顔を下から除きこんできた

「あ、はい：でお話というのは？」

無駄な質問だ

どうせあの事についてなのだから：

「昨日は喧嘩を止めて頂いてありがとうございます」

七村は勢いよく頭を下げる

「いや私もいつかボコってやろうと思ってたんです！」

七村は茂木に背を向け腕組みをしながら話し出す

本当によくしゃべる娘だと茂木は会って間もない少女の第一印象を着々と構築していく

「でも、命に関わることであるじゃないですか？私、うまく加減できないものでして」

「ちょっと聞いてます？」

七村はまた茂木の顔を除き込む

「ええと、話ってそれだけ？」

拍子抜けした茂木は改めて問い返す

「ええ、『お礼』はこれだけですが？」

「あーそうですか？じゃあ俺たちはこれで…」

茂木は後ろを振り向きいつの間にか5mほど離れていた磐郷の方へ向かう

しかし茂木と磐郷がちょうど並んだ時二人の間を高熱の何かが通り抜けた

磐郷は二射目をバックステップでかわし茂木は七村の方を向き少女の手、正確には人差し指から放たれたそれを盾を出して受け止める

「何すんだよオマエ」

磐郷が茂木の隣に並び叫ぶように言う

「あなたには関係ありません」

少女は冷たく言い放つ

「なんだとオ？」

磐郷はポケットに手を入れようとする

「磐郷、やめておけ俺がやる」

磐郷はポケットに手を入れるのを止める

「何かできることは？」

磐郷が問う

「そうだな…三分で良いから外してくれるか？」

「分かった」

そういうと磐郷は茂木とは逆方向を向き歩きだしマンホールの上に乗り

そして消えた

「『三分で良い』ねえ…どれだけ余裕なんですか先輩」

そう言うのと七村は手のひらから火球を作り出し投げつける

火球は轟音をたてながら突き進むが茂木の盾に阻まれそれが茂木に当たることはない

「無駄だってその程度じゃ」

茂木はそう言い、盾を展開しながら少女達の方へ歩きだす

七村は両手から火球を作り出し次々と投げつけるが茂木の盾は紙くずでも投げつけられたかのように傷ひとつつかない

「こんのおゝ！」七村は両手を前につきだしめいいっぱいの力を込め半径80？はあろうかという火球を作り出し打ち出す

火球は茂木目掛け一直線に飛び激突する

激突後、火球は大きな爆発と共に爆煙を巻き起こす

「まったく、このシチュエーションで『やったか？』とかって言いでもしたら君完全に死んでるよ？」

爆煙の中からうつすらと人影が浮かび上がる

「じゃ、そろそろ」

茂木は足の爪先で地面をコツンとたたく

すると、そこから青白く発光するレールがのび始める

速攻で終わらせる

茂木は心の中で呟きレールがのびると同時に飛び乗る

リニアモーター
『電磁走行』

能力で固めた物体とレールの磁力的反発で高速で移動する

電刃事変で作りの物体は電気の性質を持つため電磁石と同じ要

領で磁界を発生させることが出来る

靴を固めたためボードほどの安定性はないが短距離の移動なら可能だ
茂木は七村の周りを円を描くように走行しその時にできたレールからさらに壁を作り出し七村を円柱状の檻で囲み蓋を閉じる

あとは、速攻で謝ってしまえば…

茂木は金髪の少女の方を向く

思えば名前も知らない娘にあんな事をしておきながら学校に送っただけで謝ったつもりになっている自分に七村が怒るのも無理はない

まあこんな思考も七村を理解したつもりになっているのだろうか

七村を覆っている壁は半透明なので中の様子が伺えるが七村はさっきまで茂木のいた方を向いたまま呆然と立ち尽くしている

チャンスがあるとすれば今だ

茂木は気を付けの姿勢をとる

「あのっ…」

茂木の声に反応して少女は茂木の顔を見る

身長差のせいで自然に少女は上目使いになる

「その…昨日は色々とスイマセンでしたっ！」

茂木はさっきの七村に負けない勢いで頭を振りおろした

7話 再会（後書き）

お久しぶりです

ただいま被災中なのでパソコンがありません

誤字脱字、ルビの間違いなど多くなるとは思いますが楽しんで読んでくれたら幸いです

次回辺りから物語のメイン部分に入るので楽しみに待っていてください

8話 雑魚に全力（前書き）

この物語はフィクションです

登場人物名、地名、事件等は現実のものとは一切関係ありません

8話 雑魚に全力

午後3…37

頭を下げた約5秒

とてつもなく長く感じる時間の中で突如、茂木は嫌な寒気に襲われたそれを放ったのが呆然と立ち尽くしたままの七村なのか

自分が頭を下げている少女なのかそれとも全く別の何かなのかは本能的に理解した

茂木は顔を上げて少女の顔を窺うことも忘れ後ろを振り向く

空に向かって伸びる一筋の光の矢

ビル郡から突如現れた直径2、3mはあろうかというオレンジ色の光線は雷をまとい雲を突き破る

普通…というよりほとんどの人間が驚愕するであろう光景に茂木友孝は驚愕しなければ眉一つ動かす事なくそれを見つめる

驚く方がどうかしているのだ

昨日テレビで放送されたばかりなのに

「オイッ茂木い！」

今度は側溝の蓋の上に現れた磐郷が声を荒げる

「まだ続いてたのか？とっとと行くぞ」

バシッと茂木の腕をつかみグイグイと引っ張る

「ちょっ、行くって何処に？」

「決まってるだろあの光線の出所だ！」

そのまま引っ張ってマンホールの蓋のうえに乗る

「いや、マジでちょっと」

茂木は磐郷の手を振り払う

「何だ？少しは自分の力を自覚しろ」

「ほっ…ほらあの二人を先に逃がした方がいいのでは？磐郷くん」

七村はともかく金髪の娘の方は明らかに戦闘向きではない…気がする

どのみち何が起きているのか分からない娘の状況で少女達をおいて
けぼりにするのは気が引けた

「分かった」

磐郷は少女達の方を振り返りうなづく

「お前を送った後でな！」

悪役のようなセリフをはいた後茂木の視界から磐郷や少女達は消え、すぐに別の景色と入れかわった

さて、どうしたものか…

見上げた空はビルに囲まれさっきより狭く足元にはマンホール

明らかに磐郷に飛ばされたようだが周りには光線を打ち出すような物も能力者もない

『ワープバイブ図形転送』磐郷の能力だ図形を平行移動させた範囲にあるものなら触れる事なく重量・距離関係なく相似な図形の平行移動させた範囲に転送できる

というわけで全てが相似の関係にある円を使うと転送ミスが頻発する

状況が状況だけにこんなときにはミスらないで欲しい

「とにかくここは、磐郷が来るまで待った方がいいな」

端から乗り気ではないが磐郷がいないと帰りたくとも帰れない

「目標補足・・・ターゲット照合・・・データ合致、サテライトスリンガー」

誰もいないはずの路地に電子的な人工音声が響き渡る

「は？」

茂木はとっさに両手を通路の側に突き出し路地をふさぐように盾を展開する

案の定その後機関銃系統の連射型の銃で撃たれたと思われる数十発の弾丸は茂木の両方の盾を襲った

「おいおい、一機じゃないのかよ」

一機、そう判断したのはさっきの人工音声がこの襲撃者のものであると推測したからだ

そして、もうひとつ

これがロボットの類だとしたら東側（うち）にそんなたいそうな技術はない

「現状使用装備の攻撃的效果・・・皆無・・・データベースより検索・・・効果的戦略不明」

人工音声は先ほどと同じく一機分のみが響く

「装備選択・・・火力による制圧を開始します」

路地の奥の暗がりから一機が音もなく飛翔する

暗がりを抜け茂木のビルの高さを超えてやっと見えたソレは中学生のような大きさに上半身しかない人型のフォルム

人間で言う腰から下にはクリスタルを連想させる角錐

指から肩までのあらゆる関節の装甲がブレード状に突き出している

その人型は赤く光る双眼のカメラで茂木を見下ろすかのように滞空する

もう一機も茂木の上を通り過ぎもう滞空する一機の方へ向かう

すると、その機体はもう一機の裏に回り首から伸びるブレード上のフレームを掴み

一瞬のうちに二つの四角いコンテナへと姿を変える

変形・・・ではないまるで機体がとても小さい何かに分解されそれが新しく組み換えられたかのようにだった

そのままコンテナは首のフレームから両肩の上に移動する

なにか来る、そう感じた茂木はどこから来るか分からない攻撃に対してマンホールを底面とした円錐形に盾を張る

直後、コンテナが開き中から多数の小型ミサイルが姿を現し様々な軌道を描きながら茂木のほうをめがけ飛ぶ

茂木は盾から地面以外の方向に向けて無作為に電撃を放ち弾幕を張る

茂木の電刃事変で作り出した物体は能力をとかない限り半永久的に実体を保つことができるが破損した場合修復するために電力がいるすなわちこのような場合は下手に受けるよりもライターに着火する程度の電流で弾をすべて誘爆させてしまったほうが電力の消費を抑えられる

「カートリッジエンプティー・・・可能な限りの構築物^{マテリアル}を回収」

爆撃が止むと同時に再び電子音が響き渡る

何やら一々現状を報告してくれる便利なロボットだ

恐らくは弾切、れならばチャンスだ

茂木は人型めがけてぶつける様な勢いでレールを展開

同時に先ほどと同じように靴を能力で固め垂直に近い角度を電導走行で進み一気に距離をつめる

人型は攻撃はおろか回避行動すらとらずに滞空したままだった

「くたばれ電子機器ッ！」

茂木はソレの自分とさほど変わらない大きさの頭を両手で掴み電流を流し込む

が装甲が絶縁体でできているのか電撃の効果はまったく見られない

「ならッ」

電圧をあげるなんて馬鹿な真似はしない

絶縁体でできているとしたら電流が全部熱に変わるだけだ

つまりここは非科学の定番

茂木は右手を離し自分の棒状に電撃を固める

もちろん硬度が計り知れない装甲にそれを突き刺す腕力もなければ
するつもりもない

人型の頭を両脇から挟みこむように2本のレールを展開しながら足
場のレールも後方に伸ばしながら距離をとる

3本のレールをの磁力で棒を浮かせ両手を広げて両脇のレールに足
場には足から電流を流し次回の強さと向きを変える

棒は磁力の反発でレールの間を人型の頭めざし突き進む

いや、正確には茂木にも突き進む様子は見えていない

少なくとも電圧を上げたら棒が突き刺さっていたというのが茂木の
認識だ

「終わったか？とつと電気回収して磐郷に合流しないと」

顔面から黒煙を噴出しながら落ちていく人型を見下ろしつぶやく茂木

両腕を広げ両脇のレールに触れて電気を取り込み

自分の敷いたレールを逆送しながら足を通して電気を取り込んでいき
元のアスファルトの地面に足をついたところで再び人型のほうを向く

赤く光っていたカメラの光は失せピクリとも動かなく落ちた衝撃で

装甲にも微細な傷が入っていた

回避できない速さで放ったつもりではあったが

相変わらず回避動作は行わなかった

「おっとコレも回収しとくか」

人型に向かって歩き出し額の棒に手をかけたそのとき

「ガ・・致メイてきな損傷ヲカク認」

額から火花を飛びらせながらノイズ交じりの現状報告をする人型

茂木は思わず後ろに飛びのく

「オートリカバーサドウ・・ガ・・ショート回線シュウフク・・中
スウ機能を移動」

「各機能正常・・」

報告とともに人工音声からノイズが消えていき小さな傷も修復して
いった

『致メイてきな損傷』となったらしい額は棒が邪魔になっているの
か再生できていない

「戦況把握・・・目標撃破は不可能と判断、採取データの保護を優
先し帰還します」

「戦闘機能を破棄・・・移動特化に移行します」

人型の首の後ろのブレードが真っ二つに割れ左右に広がり二つのコ
ンテナはそれぞれ一瞬で形状を変え割れたブレードに接合し翼のよ
うな形状になる

「戦闘放棄・・・離脱します」

再び音も無く飛翔する人型は今茂木がいる路地に沿うように飛んで
いく

相変わらずどんな仕組みで飛んでいるのやら

だが今の茂木にもう一度あの人型を倒そうなんて気は湧かなかった
後一撃のところでの回復アイテム、倒したと思ったラスボスが戦闘
中にまさかの第二形態に変貌してHP全回復

普段から経験していることではあるが肉体労働を伴った後の気力の
喪失感が生半可なものではない

「オラああッ！」

茂木は再び棒を作り出しレールを空に向かって伸ばす

一度レールを空に伸ばしたのは地面や建物に攻撃があたるのを防ぐ
ため

レールがある程度の高度に上がったところで敵のほうを向ける

その後棒をゆっくり（さっきの射撃に比べれば）と上昇させる

照準合わせなんて面倒なことは今の気力ではできない

レールはアイツの棒を追尾させ棒はレールの間を通るだけ

「今度は粉々にしてやるよ！！」

レールを伸ばしながら距離を詰めたところで電圧を一気に上げた

今度は頭ではなく胸を貫くように棒を誘導する

音速を超えて進む棒の回りにはショックウェーブが発生し人型を貫く瞬間に茂木の言葉通り粉々に人型を破壊する

茂木は人型の破壊を確認して振り返り後から来る磐郷に配慮して戦闘中も保護し続けたマンホールの元へ移動する

ここまでしても何も解決していない

昨夜の事件もさっきの光線もそしてあの少女のことも中途半端なまま・・・

そんなことは分かっていた

最初の二つは確実につながっている

今は消耗した体力と気力を回復するため

茂木は長さも質も保証できない眠りについた

8話 雑魚に全力（後書き）

お久しぶりです

まだ読んでくれてる人いるかな？

バトル回始まってきたのでコレからもよろしくお願いします

9話 遠退く日常（前書き）

この物語はフィクションです

登場人物名、地名、事件等は現実のものとは一切関係ありません

9話 遠退く日常

午後3…58

昼間と夕方の間の中途半端な時間帯

空が赤みを付け、周囲がやや暗く包まれてきた頃

つい数時間前まではビルの建設上だったそこに一人の青年と少女の姿があった

「うわっ一機落とされたよ」

手元のポータブルゲーム機大の機器の画面を見て声を上げる青年

「まだ一機だ、あせるな松尾」

この騒動の根源である巨大な銃

砲身だけでも5m、鉄骨三本を束にしたようなその銃は銃口を天に向ける様に無造作に『置いて』あった

「アリスちゃん、別に焦ってなんか無いって びっくりしただけで」

アリスと呼ばれた少女かは、命令口調だが松尾と並ぶと年の離れた兄弟であるように見える

「ビククリするほどのことじゃない・・・一機しか倒せてないなん

て・・・能力者、弱い」

淡々と述べるが事実アリスが言っていることは確かに正しい

落とされたのは『雑兵』と呼ばれる西側^{こしやう}では戦闘以外にも様々な用途で使われるロボットの代名詞のようなものだ

ただ、最高レベルのCPU、データベース照合機能を使用しての装甲及び戦略の最適化機能に自動回復機能だけの…

やっぱり、訂正アリスの思考回路はおかしい

しかも、戦闘データを送らせることすらさせずに撃破すると来た

正直化け物だ

その化け物を弱いと罵れるアリスも化け物なんだか、
単に自信過剰なんだか・・・

「でも、その設定のせいで構築物^{マテリアル}も底をついた・・・今奇襲^{マテリアル}されたらどうするつもり？」

「されたら」では無く今一機落とした奴は来るぞと少女は言いたげだ

松尾はポータブル機器を置き座っていた角材の上において

少女の脇を通り過ぎ天を向く砲身の元へ向かう

「どっちみち俺は負けませんよっと」

松尾は銃の安全装置を解除して引き金を引く

ジェネレーターの駆動音が轟き数秒遅れて弾丸が発射され刹那と呼ばれる時間のうちに雲を突き破る

それはこれから戦う化け物への威嚇であり、狼煙であり、松尾は銃の安全装置を解除して引き金を引く

ジェネレーターの駆動音が轟き数秒遅れて弾丸が発射され刹那と呼ばれる時間のうちに雲を突き破る

それはこれから戦う化け物への威嚇であり、狼煙であり、道標であった

弾丸は光線にしか見えない光に尾を引きながら弾道は雲を突き破る

「松尾・・・無駄打ちしないで・・・私が疲れる」

自分なりに格好つけたつもりだったのだが見事に駄目だしを食らう

「はいはい、ごめんねアリスちゃん」

松尾は少女の頭にポンツと手を置こうとするがアリスは松尾の手を強めに振り払う

「子ども扱いするなァッ」

こういう時だけは無表情のアリスの顔にほんの少し新鮮さが出る
からかいがあると言うものだが本音を言えばこの娘には笑顔で

いて欲しいと思う

「はいはい、すいませんでした隊長殿」

「うん、分かればよし♪」

そう、こんな笑顔で

茂木はまた悪寒を感じ目を覚ました

何分寝たか分からない寝たという感覚すらなかった

とにかく体中のありとあらゆる筋肉と関節が痛い

「やっおはよう茂木君」

路地に座る茂木の傍にはずっと守り抜いたマンホール

底の上には我が親友磐郷が立っていた

「やっ」

「やっじゃねえよ！変なところに飛ばしやがって」

磐郷が話終わるのとはほぼ同時に茂木はツツコミを入れる

「いや悪いねとりあえず適当なところに飛ばして迎えに行くつもりだったんだがどこにやったかわかんなくなってる」

「人を物見たく言うな！」

茂木は立ち上がろうとしたが頭から血の気が引きその場に座り込む

「おい大丈夫か？」

茂木のようなタイプの場合能力の放出と体力の消費はイコールの関係にある

いつもケンカであろうが通学であろうが自分の吐き出したものは残さず回収していたのだが

さっきは我武者羅になって回収できないほどに放出しきってしまった

「多分だめだわ」

「なんでそんなに消耗してんだよ？」

磐郷は茂木に手を差し出す

その袖は黒く焦げたり穴が開いたりしてひどくボロボロだった

磐郷一人なら一人ならあれから逃げるのはたやすい事のはずだ

だがこれだけボロボロだと言うことは・・・

「何か・・・すまないな本当に・・・」

直接的にはないが、あの二人をこんなことに巻き込んでしまったのは自分のようなものだ

それを、日常に送り返してくれた磐郷には

茂木は磐郷の手をつかもうと手を伸ばすが磐郷の手は茂木の手の脇を通り過ぎて茂木の手首をつかんむ

手首をくるんと回し茂木の手のひらを上に向けて

一本バチバチと火花を散らすぶつといケーブルを手のひらに置く

「へ？」

一瞬状況が理解できなかった茂木は磐郷の持つケーブルの元を目でたどる

そこにあったのは用途も何も分からない、ただただ巨大なバッテリーだった

再び、磐郷のほうに顔を戻すと

磐郷はにこりと微笑み、まるでおばあさんが孫に小遣いを上げるときのように強くケーブルを握らせた

「ぎやあああああ」

茂木は絶叫する、無論痛みでだ

能力の性質上感電死するなんて事は無いが痛い、とにかく痛い

意識が飛びかけたとき茂木はケーブルの先から出る電気を固めて後

る向きに小走りで距離をとる

「いッッッッ痛えな！！いきなり何すんだよ！！」

「何って？回復だよ回復」

磐郷はキョトンとして返す

「体が治っても精神がどうにかなるわ！！」
あたま

まったく何が気に食わなかったんだ

ヒュンっと目の前に磐郷の顔が現れる

その足元には大きさは違えど円形のマンホール

「よしっじゃあ行こうか茂木君」

磐郷は茂木の手を引っ張りもとの大きなマンホールへ向かう

足場の図形に入りきらないとその部分が転移のときに取り残されて
しまうからだ

「いや、頼む、頼むから待ってくれ」

磐郷はこのヘタレめといった目でこちらを見てくるが構わない

さっきの失敗をされるよりましだ

「今度は、転移じゃなくて移動で頼む」

磐郷の能力の特徴は相似な図形の平行移動させた範囲に転送できるということ

つまり、別の地点にある相似な図形ではなく元々の図形の上下でも移動は可能なのだ

これを茂木は普通の転送と区別する際に「移動」と呼んでいる

「お前がそれでいいなら、そうするが・・・いやそうしよう」

何か意味深な発言だったがとにかくこの事態をどうにかしなければ

「じゃあどの変に足場張ればいい？」

「そうだな・・・中央に向かって斜め上45°位に張ってくれ」

茂木は言われた通り、だができるだけ電力を節約し限りなく薄く張る

「ささ、早く乗れ」

「お前は？」

「俺は転移で行く」

「そうか」

茂木は靴を固め電磁力で張り付きながら足場を上る

「それじゃあ、いつてらっしゃい！！」

磐郷は右手で強く叩き茂木の視界は一瞬で入れ替わった

茂木の体は音も立てず、風も斬らずに空中を移動する

もちろん、45°という角度ゆえ目標地点へ近づくにつれ高度はどんどん上昇していく

「クッソ、磐郷これがしたかったのかよ」

目標地点上空に到達したとき茂木の体はビルひとつ軽く超える高さに到達していた

下はビルに囲まれた閉鎖的な空間だ

茂木の移動が磐郷の能力の域から外れ、落下運動を開始する

もちろん、磐郷の能力で地上に移動させることも転移させることもかなわず

茂木は頭から真っ逆さまに急降下する

「ぎゃあああああああ！！」

今日一日で何度絶叫したか分からない

そもそも、ただの中学生が後輩の女子に喧嘩を売られ、得体の知れない口ボットに襲われ

おまけに、今度は縄無しバンジーだと？ふざけんじゃねえ

手を前に突き出し、数m先に数十センチ幅ごとに地面に到達するまで盾を展開し

頭を保護しながら落下する

その一枚一枚はとても薄く茂木の体は盾を突き破っていく

もちろん考えなしではない

止まることよりも盾の回収と原則を優先させた形だ

十分に減速すると

最後の盾に残りの盾に全ての盾を集めそれに足で着地する

そして、茂木の体は落下運動の慣性から逃れ今度は意図的に最後の盾を砕く

「おおう来た来た」

「はしゃぐな松尾」

落下中には見えなかったがこの2人が一連の事件の当事者・・・

であればうれしい、問題が一気に片付くから

とにかく今は、この2人をどうにかするしかない流れのようだ

9話 遠退く日常（後書き）

お久しぶりです

震災からも復興し始め新生活も無事に始まりました

つまり、今度はリアルが多忙になり始めるため更新遅くなります
ばちばちやっていくのでこれからも応援よろしくお願いします

10話 決着？（前書き）

この物語はフィクションです
登場人物名、地名、事件等は現実のものとは一切関係ありません

10話 決着？

午後3…58

2人ともどこか軍隊を思わせる制服を着用していた

違いがあるとすれば、少女はベレー帽を着用し、下半身装備がズボンではなくスカートという事くらいだ

青年の髪の色は、絶滅危惧種、茶色のダルトーン

少女の色も青であるもののペールでもビビットでも無く暗めで落ちて着いた色だ

両方とも普通に出会ってたら友達になりたい人種だな・・・って早速脳みそが現実逃避モードだ

「何をしに来た？ってのは適切じゃないな・・・」

最初に切り出したのは、後ろの少女に松尾と呼ばれた青年だった

「アリスちゃん、処理のついでに判定も頼むわ」

「任務中は、形式上『隊長』と呼ぶのが『適切』だ」

少女は青年の後ろから前に出て天に向かって右手を突き出す

「出力^エ」

少女がそうつぶやくと、周囲から光の粒子のようなものが肘から上

と手首から指先にかけて吸い付くように集まっていく

粒子の収束が終わると同時に発行も止み少女の手には機械的なグローブが

上腕二頭筋のあるあたりに半球型のさまざまな色をした水晶のようなものの付いたバンドが360°腕を囲むように現れる

グローブは手の甲にバンドと同様の水晶のようなものがあり色は藍色を少し明るくしたような色で

指の各関節ごとに鉄鋼のようなものが覆う

少女は手を前に突出し

「カートリッジ、換装」

次に少女がそう言うバンドから緋色の水晶がバチンという音とともに外れ宙に浮く

と同時にグローブの半球部分が勢いよく手首側にスライドし緋色の水晶があつた場所にジョイントされ

緋色の水晶がグローブに装填される

「オーバードライブ」

少女は再び手のひらを天に向けるとグローブがパソコンでディスクを読み取るときのようなキュイイイイインという音を立てると

手のひらにはサッカーボール大の緋色の光の球体が現れる

その球体はみるみる大きさを増していきこの閉鎖的な空間を押しつぶすかの様な大きさまで膨れ上がる

と、一定のところまで膨れ上がった所で球体は縮小を始めた

圧縮を始めているのだ

茂木は反射的に目の前に盾を張る厚く、厚く

だが少女はそれを茂木に向けることはなく

天めがけてそれを打ち上げる

それは、ビルの頭を超えると膨れ上がり茂木の視界をすべて光で塗りつぶした

ああ、もうめちゃくちゃだ

美咲は勝手に暴走しちゃうし、茂木先輩には誤解させちゃったみたいだし、先輩の友達にも送らせちゃったし

先輩には聞きたいことがあっただけなのに

「ねー零奈ってば」

美咲には、なぜ零奈がこっちにそっぽを向けたままなのか理解できなかった

自分は、親友のために行動し、その役目を果たしたと思ったからだ

「なんか知らないけど悪かったよ　おい」

悪気はないんだよな　と零奈は思う

美咲は友達思いのいい子だしちょっとテンパっちゃうだけで・・・

「いいよ、怒ってない」

「怒ってるじゃん」

その時、再び光線が空を貫いた

それを見て零奈は中央へ向かって走りだす

距離は1? 弱、体力に自信があるわけじゃないけど、急がないと

「ちよっ、零奈ッどこ行くの!？」

「あそこに行けば先輩たちがいると思うの」

「どうしてさ？」

「あの2人なら覚えてると思うの」

休日にもかかわらず2人は中心部に向かっていた

普通なら用の無い管理局のあるほうに・・・

「もう、待ってよ」

「さて・・・と」

光が消え茂木の視界に再び二人の姿が浮かび上がったとき

青年は口を開きこう問いかけた

「今、何が起こった？」

「はい？」

「別に模範解答なんて無いから道德の時間みたいに言ってくれて結構なんだが」

何だこれ？ひょっとしてルート分岐か？

だとしたら回答しだいで殺されかけたりするのか？

「うーん、警戒してるね」

青年は少しずつ茂木のほうに歩み寄る

茂木は、さっき展開した盾を電磁力で浮かし防御の姿勢をとる

「おっと、その反応は・・・」

青年は歩くのをやめる

「覚えてると判断しちゃっていいのかなッ!？」

青年は右手を前に突き出す

「^{エンジン}主力!!!」

そう叫ぶと青年の肘から指先の周りにバチバチと火花を散らしながら青色のパーツが無数に現われ

指先から順に青年の体表に癒着していき

アニメでよく見るパワードスーツのような装備となった

「あちやゝやっぱ残存エネルギーが少なかったか」

青年は武装した右手を見ながら言う

「まっ、十分だけどね」

青年は右の手の平で地面に触れ、突き放す

青年の体は低空を飛行しながら茂木の方へすさまじいスピードで迫る

茂木は盾の底辺を地面に突き刺して衝撃に備えた

しかし、青年は減速することなく勢いを拳に乗せ盾を殴る

盾は地面のコンクリートをえぐりながら茂木の方へと吹き飛ばされる

さつき盾の硬度を上げたのが災いした

盾は茂木を守る役割を果たさずに茂木に激突する

そのまま体は吹き飛び何かに激突して止まった

茂木の口の中に血の味と鉄の臭いが広がり視界が一瞬二重に歪む

「ずいぶんと弱いもんだな」

青年は右の手を開いたり閉じたりさせながら迫る

「対象じゃないにしても雑兵2機を倒した第肆段階だと思ったのに・
・とんだ期待外れだぜ？」
フォースフェイズ

「!？」

「何で俺が第肆段階が分かったかって？」

青年は右耳にその武装された手を当てて茂木をバカにするように子
芝居を打つ

茂木は盾を引き戻し青年の方に飛ばす

無言で

「聞けよ」

青年はまた盾を殴る

茂木も磁力で盾を押し続ける

結果、茂木の電力を大量に食らって出来た盾はいとも簡単に砕け散ってしまった

「あれは光信号で脳をいじくってしまう能力なんだがどうやら、第肆段階以上……いや、第参段階以下にしか効かなくてね」

「それを逆手にとって君の進度の判定をしたわけさ、後処理のついでにね」

「能力!？」

この世界で『能力』という単語の使用頻度が最も高いのは超能力を指す場合だ

それに、後処理というのは恐らくこの集団的記憶喪失のことに違いない

昨日から今までのことは全部こいつらの仕業ってわけか

「そう、でもアリスちゃ……隊長は能力者じゃないし、そんな腐った連中を仲間に引き入れるほど西側も落ちぶれちゃいない」

西側の人間が能力者を忌み嫌うのは当然

でなければ端から日本の東西分離なんて起きちゃいない

「随分な言い様だな技術は西の物だとして使ってるのは能力だろ」

「アレは『能力が科学にひれ伏した』象徴でもあるのさ」

青年の右手に光の粒子が集まって行く

茂木の後ろから

振り向く

銃だ、それも巨大な

銃は銃口から光の粒子へと姿を変え松尾のもとへと集まっていく

「これが西の最高技術『構築物』マテリアル」

「こいつの使用によってどんな重厚な装備でも運搬が可能になった」

青年の手元のに集まった構築物は腕の装備と統一感のあるガトリング砲へと姿を変えた

「さあ名も知れぬ能力者君、雑兵一体倒した実力をこの俺に見せてくれ」

相手は理屈は分からんが科学的技術で能力を再現いや

『使える』ような連中だ

あんな一般装備（既に一般の域を出てはいるが）でも相当な性能のはずだ

茂木は腹をくくる

そして松尾のガトリングの銃口が回転を始め銃弾を打ち出す

茂木の最初にとった行動はもちろん盾を張ること

防御はすべての基本、格ゲーの攻略サイトに載っていた

銃相手なら弾切れを待つて距離を詰めればいい

右手以外は生身なのだから電気を流せば動きを止められる

「弾切れならまったくも無駄だぞ」

そんな茂木の考えを読んだかのように松尾は告げる

そう、茂木の盾に止められ落ちた弾丸、ガトリングから弾かれた葉莢

それらが全て粒子状に戻り松尾の方へ逆流してガトリングへと取り込まれているのだ

「弾丸の循環精製・・・」

「科学は行き過ぎると魔法にしか見えない」と言う様な言葉を誰かが言っていた気がした

今の状況がまさにソレ

いわば無限矢状態

弾切れを知らぬガトリング砲と電力が切れるまで戦う一方的な消耗

戦なのだ

牽制に盾を通して電撃を飛ばすが松尾はヒョイとガトリングを上
に放り投げ右手で受け止めてしまう

さっきのロボ（確か雑兵）と同様こちらの特性に合わせて装甲を変
化させているらしい

だがガトリングは宙を舞い右手はふさがっている

電撃を照射状態にして茂木は^{ゲロレ}レールを展開し一気に距離を詰める

「はゝい残念ッ」

空中で分離したガトリングが松尾の手元に戻り再構成される

松尾はそれを左手で持つ

再構成の時に軽量化されたようだ

「それはどうかな？」

「さっきの！？」

足元から浮かび上がるそれを見て言う

そう『さっきの』盾の破片だ

破片といってもそれぞれは元の硬度を保っている

つまりそれと比例して電圧も

両手がふさがっている

装甲は右腕だけ松尾には絶望しかなかった

茂木が能力を解き盾は高電圧の電流を放電させた

10話 決着？（後書き）

お久しぶりです

仕事の合間を縫って何とか出来上がりました

書きたいのに書けないそんな状況です

先のアイディアばかりがどんどん浮かんでくるのに話が全然進められない

何とももどかしい状況です

これから読んでくれれば幸いです

11話 仲間入り（前書き）

この物語はフィクションです

登場人物名、地名、事件等は現実のものとは一切関係ありません

11話 仲間入り

「やったか？」

そう言い掛けてさっき七村に言ったことを思い出し内心苦笑する

とは言え生身に浴びせてやった電撃はスタンガンなどの比ではない

最低でも行動不能位にはなってもらわないと困るんだが

しかし、男は当たり前のように茂木の前に立っている

そう、やられてなどいなかった

それはいわゆる『無傷』と呼ばれる状態だった

「ダメなんだよコレじゃ」

「お前は『行動不能になる』以上の攻撃をしていない、むしろ以下だ」

松尾はガトリング銃口を茂木の頭に突きつける

ゼロ距離と言うやつだ

「それが覚悟の差ってやつよ」

「自分の力でその手を汚すことを恐れている、だから手を抜いてこ
うなる……雑兵よりも脆い人間にやられんだよ」

返す言葉もない

ヤバいって事は分かっていた、死にそうにもなった

でも、心の何処かで『何とかなるさ』って思っていて遊び半分で首を突っ込んでいた自分がいた

「……………」

目を閉じる

松尾がトリガーを引くまで恐ろしい程にそれは長く感じた

時間を圧縮でもしたかのように

抗う手段は放棄した

目の前にある『死』は迫るものではない『確定事項』だ

ゼロ距離からの弾丸はなんの例外もなく俺の頭蓋を吹き飛ばすだろう

あの男がそうだったように

今の俺に何が出来ようか？

後悔はある

でも、生への執着は無い

我ながら驚きだ

それ程にまで茂木友孝の人生は薄っぺらだったのかもしれない

走馬灯も改装も出ない程に

いいさ、覚悟は決めてやるよ

再び目を開ける

松尾はトリガーを引かなかったのではない引けなかったのだ

松尾の持つガトリングは崩壊しトリガーより先はもうなかった

「クッ」

汚物でも手に触れたかのようにガトリングを投げ捨てる

「アリスッ！」

「隊長と呼べと！！」

瞬時に換装し右手を上には上げるとオレンジ色のエネルギー球が複数現れる

それはビルに囲まれたこの空間の中心から周囲のビルの全階層に向けて一斉に打ち出されアリスはそれを連射する

ガラスが割れ、壁は碎かれその破片が降り注ぐ

茂木も例外ではない

ちょうど人ひとり潰せそうな瓦礫……と呼ぶにはデカイ

壁がそのまま降ってきた

しかし、電力がない従ってアレを砕くことも受け止めることも出来ない

ついでに、逃げることも出来ない

電力を放出しきったから
たいりよく

だがその壁は何処からともなく飛んできた火球が着弾し爆発し四散した

その射線上を遡る

人はいない

松尾たちもその方向を向く

「そこか」

アリスは連射を止め漂うエネルギー球をすべて収束し打ち出す

打ち出された光球はさながら箒星を思わせるようにビルの中腹目掛けて飛ぶ

だがそれまで

球は空中で制止し粒子へと還る

「中々やりますねー茂木先輩」

聞き覚えがある

割りと最近…火球…

「七村か!？」

「ピンポンです」

何かキャラが違う気がするのは置いておこう

「ヌケヌケと…」

アリスは頭上で再び光球を収束する

だがサイズがさっきと桁違いだ

さながら『最終奥義何とか玉』といった感じのデカさだ

だがソレも無意味だった

光球は出現するやいなや崩壊を始め崩壊はグローブまで達する

素手は無傷だった

どうやら人体に影響を与えず構造物だけに干渉するもののような

「退くぞ松尾」

松尾はアリスを抱き抱え右手で跳躍しビルを飛び越え姿を消した

俺の意識はここまで

気が付くと見知らぬ天井、壁・・・病院ではなさそうだ

「起きました？ てっきりもう起きないかと思いましたけど」

「七・・・村…？」

頭がぼおつとしてそれ以上言葉が続かない

「そうです、先程はお世話になりました」

どうやら嫌われたままのらしい

全く心当たりがないわけではないが

「ここは？」

「零奈の部屋です」

知らない名前だ

「アレはお前がやったのか？」

少しずつ頭が冴えてきてあの出来事を思い出す

雑兵というロボット、松尾にアリス

それに、彼らを無力化した何か

「私じゃないとは言えますが機密なので今は言えません」

仏頂面で言われる

「他に質問は？」

「あの…七村はさ、覚えてるの？昨日のテレビ」

「覚えてますよ」

「それじゃあ七村は第肆段階なのか？」

七村の眉間からピキッという音が聞こえた気がした

どうやら嫌味に思われたらしい

「いえ、私は第参段階ですが私達の中には記憶改竄に対抗できる仲間がいますので」

「それって俺に言って大丈夫なことなのか？機密とか仲間とか」

「大丈夫です」

「茂木先輩は私達の仲間になっていただくので」

「なん・・・で？」

「それについては零奈が来てからお話し致しますので死んだように眠るか眠るように死ぬかしてお待ちください」

どこの誰とも知らぬれいなさんよ、何故私とこの方を呉越同舟にしたままお出掛けになさったのですか？

仕方がないので死んだように眠る事にする

布団に頭を埋めるようにしても何も聞こえない状態になって本当に寝てしまおう

・・・・・・・・・・・・・・・・な！？

良い匂いがするんですけど

コレハレイナサンノベットデハ・・・？

ヤバイ理性が保てんわ

ガバッと起き上がる

「どうかしましたか？」

七村は冷たい視線を浴びせてくる

「トイレっす」

「階段下りてすぐ右です」

聞きながらドアのほうへ向かう

空けて部屋の外に出ると中の様子を伺うように後ろ向きに丁寧にドアを閉めた

だが茂木は目の端でなびく金色の何かを捉えた

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あの娘だ

そしてすぐ理解が追いつく

そういや・・・あの時も一緒にいたしな

「あっあの、べつ別に盗み聞きしてたわけじゃないんです。ただドア越しに先輩と美咲が話しているのが聞こえてきて入るタイミングを探ってただけで・・・」

この娘が零奈さん・・・だよな？状況的に

手にしたお盆にはおしぼり、冷水・・・etcの看病セット

顔が真っ赤なのでそれは俺じゃなくて自分のために使ってほしいくらいだ

ってかなぜ左から現れた？ドアを避けたのにドアの向かう方向に避けちゃったと？

全力で開けたら顔面強打じゃすまないだろ

「それでええとトイレは階段下りてすぐ右、ティールーアイエルイーティールTOILETって看板かけてありますっ」

「ああ、どうも・・・」

もとよもとトイレなど行く気などさらさら無かったのだがそこまで丁寧に説明されると断れない

パシッ

「あ、案内します!?!」

語尾が疑問形になっているが零奈さんはオレの手を引っ張って前進し出す

「いや、いって階段も目の前だしトイレだって看板見れば分かるし」

手を振り払おうとも考えたが彼女の態度が頑ななのでやめる

親切を踏みにじるのって申し訳ないから

たかが数十歩、そんな距離に手を引かれながらトイレに到着（所要時間 約50秒）

その後のトイレは地獄だった

流すだけでは音で用を足していないのが分かってしまう

かといって着たかった訳ではないので小も出ない

あまり長いと大じゃないかと思われるのも嫌だったので

トイレ用洗剤を水がたまっている場所にチョロチョロとたらしして誤魔化した

零奈さんは階段に腰掛けてお待ちになっていた（オレの目線があと3センチ低かったらスカートからパンツがお見えになってしまっていただろうこと事はあえて口には出すまい）

「おまたせ」

「行きましょう」

零奈さんは先陣を切って階段を上り出す

一段上るごとに『上を向く』という欲望に負けないよう格闘したものだ

そして部屋のドアの前へ

零奈さんはお盆を取りながら先に入るように促した

部屋に入ると七村がまた何か口に仕掛けたがすぐに零奈さんが入室したので口を噤んだ

「じゃあ先輩、こっちに掛けてください」

零奈さんが座布団を三角形に並べお盆を中央に置くお盆の上には炭酸飲料とポテチが2袋用意してある

さっきのお盆は寝ているときの看病用にこっちはこの会談用

わざわざトイレまで案内したのは看病は必要ないと判断してわざわざ一階まで降りて準備したのだろう

俺はトイレを誤魔化すなんてくだらないことに脳みそを回していたのに

なんてできた子なんだろう

「じゃあ早速本題に取り掛かります」

七村の第一声により会談は始まった

「まず今日ご覧いただいたように日本の東西問題は武力衝突にまで発展しています」

「向こうの目的はただひとつ『抑止力』の抹消です」

『抑止力』昨日殺されたテレビの男も口に使っていた単語だ

「んで、その『抑止力』ってのは何だ？兵器とかそんなもんか？」

「それを聞いたら後戻りはできなくなりますよ？まあもとよりあなたが仲間になるのは決定事項ですが」

「んじゃどーぞ」

「いいんですか先輩？」

零奈さんはきよとした様子で尋ねるが一般的な反応だ

「俺だって向こうに顔見られてるし元の生活に戻るなんて思っちやいないですよ」

零奈さんにはなぜか心の声でも敬語です

「ずいぶん簡単に割り切るんですね、自分の人生に執着が無いんですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「まあいいです。続けましょう」

「兵器という表現をなさいましたがある意味正解です。西側にとっては最悪の兵器となりうるでしょうね」

「つまり？」

七村は零奈さんに目をむけ零奈さんはうなづく

「『構築物無効化能力者』です」

「!？」

最悪の兵器、俺が手も足も出なかったあの2人を能力の発動と同時に撤退にまで追い詰めた

「私の能力は構築物^{マテリアル}を分解し際しようにできなくなるように変換する能力なんです」

「でもだからって何で狙われる？マテリアルってのは軍用兵器だろ？」

「知らないんですか？西側にオリジナルで存在する人工物はせいぜい世界遺産くらいですよ？」

「それって・・・」

「そう、全てが構築物を媒体に成り立っている西側にとって零奈の能力は軍事的にだけでなく文明そのものを崩壊させる危険分子ではないんです」

何だよ、そんなの解決方法なんて1つだけ、小学生にだって理解できることじゃないか

『このままで居ればいい』だけじゃないか

放って置けば人間誰でも寿命で死んでいくし能力者だって平均寿命は数年長いが日本の基準となんら変わらない

それを何で早めようとするんだよッ

言い知れぬ怒りがこみ上げてきた

自分自身、熱くなるキャラでもないしこんな気持ちになることが嫌いだ

「何か質問はありますか？」

「じゃあ、1つだけ」

「お前らは零奈さんを守るための『組織』なのか？それともただ西側と戦争がしたいってだけの連中の『集まり』なのか？」

「組員全員のは分かりかねますが組織の行動目的は前者でしょう。私もそうです」

「分かった。協力するよ」

答えは最初から決まっていたのかも知れない

さっきの答えがもし後者だったら俺は組織を内側から変えようとしただろう

これだけ無気力な俺が随分とまあ大層な選択をしたものだ

でも、俺の答えを聞いた零奈さんの少しだけ嬉しそうな顔を見たら

何故か悪くない気持ちになったのだった

11話 仲間入り（後書き）

読んでいただいていた方もそうでない方もお待ちをいただいで申し訳ありません

最近の投稿はほぼ一ヶ月毎になってしまいますね

もう少し早くできたら良いんですが現実には甘くなく・・・
これからよろしければお付き合いよろしくお願いします

12話 正式入団（前書き）

この物語はフィクションです
登場人物名、地名、事件等は現実のものとは一切関係ありません

12話 正式入団

5月5日午前

俺は電話で指示を受けながらとある場所に向かっている

何でも、『知りすぎた一般人』という建前で俺を組織に入れるという事らしい

建前というのも、信じられないことにこの辺りの支部の頭が俺を取り込みたがっているらしいのだ

普通消されそうなものだがな

「すいません零奈さん、本当にこちらで合っているのでしょうか？」

『ごめんなさい、大丈夫です合ってます』

電話越しにも零奈さんが顔を真っ赤にして焦っている様子が分かる
そりゃそうだろ

「えーと・・・つまり、この『のれん』をくぐればいいんですね？」

とあるビデオレンタル店、全国チェーンの大きなものだ

だが、そんな事はどうでもいい

『はううーごめんなさい』

「いいですよ謝らないでください」

目の前にあるのは子供が決して入ってはならない大人の世界への入口だ

『入ったら左奥の棚の上から三段目のDVDをひっくり返して入れなおしてください』

「えっと・・・どんなDVDなんですか？」

『人目で分かると思います!!』

何故か自信ありげに答える零奈さん

「分かりました」

そう言って通話にしたままケータイをしたに下ろす

自信ありげなだけに聞き返すのも気まずい

さすがに年下の女の子にタイトルを聞くのもセクハラだし、七村に灰にされそうだ

周囲の様子を伺い、のれんをくぐる

「人目で分かる、ねえ」

棚さえ分かれば充分ということなのだろうか？

いや・・・まさか、俺の性癖を完全に把握した上で・・・ってまさかな

できるだけD^{ブツ}V^ツDが視野に入らないように移動する

「何だ、こういう事ね」

一本だけ辺りの雰囲気とはかけ離れた対象年齢6歳くらいな感じのDVDがある

「タイトル聞いても大丈夫だったなこりゃ」

言われたようにひっくり返して戻す

ゴゴゴゴゴ

棚が音を立てながら奥に移動しその後左にスライドする

「マジかよ・・・」

こんな目立ちそうな仕掛けをこんなところに作るとは

ケータイを再び顔に寄せる

「零奈さん？次はこの中に入ればいいので？」

『はい、美咲が迎えに言ってると思いますよ』

「はぁ！？」

思わず悲鳴が出る

『大丈夫です!! 誤解は解いておきましたから!!!!!!!!!!』

「信じますよ？」

そういつて電話を切る

火事にならないといいがな

でもこの通路コンクリートできてるみたいだし大丈夫か

外とは一変、棚の奥の通路は人の気配が無くどこか冷たさを感じさせた

なので、人の気配がするとすぐに分かる

・ ・ ・ ・ ・ 火種がやって来やがりました

「おーッ先輩！昨日の反応微妙だったから来ないんじゃないかと心配したんですよ？」

手を大きく振りながらこちらへダツシュして来る……笑顔で

性格が180。いや、ぶっ飛んで270。位違うんですが・・・

「昨日は本ツツ当にごめんなさい、勘違いしてて・・・」

ってか友達がパンツ見られて昨日あんなに怒ってたのに勘違いって
どんな勘違いだよ!?

「ちなみに七村さん？どんな勘違いだったの？」

そんな思考をこんな言葉に変換する

「いやゝ零奈が悪いんですよ？『パンツ見られた』なんていうから
てっきり強姦まがいな事をされたのかと・・・」

「・・・」

「そしたらまさかラッキースケベだなんて、どっちみち許せない
ですけど、仕方ないですよね」

この娘、妄想が肥大化するタイプの子ですか

「とにかく御免なさい、私勘違いすると歯止めが利かなくなっちゃ
うんです」

「いや、いいって昨日だって助けてもらった訳だし」

「本当ですかッ!？」

両目をキラキラと輝かせてグッと俺の手を握る七村

「ああ、別に俺根に持つタイプでもないし・・・」

「マジッすか？オッシャアアア！」

両手を離して万歳をする

「んじゃあ案内しますね、付いてきてください」

「おう、よろしく頼む」

切り替えが早いなという印象が茂木の頭に追加された

所要時間は約15分

今私は、ドアの前にいます

恐らくこの中に入ればリーダーなり下っ端なりがチュートリアルしてくれるのだろう

たいしたこと無距離のはずだった

だが通路はトラップの雨あられ

唯一の救いは何故か全てが電気系だったことだ

おかげで俺は（体力的には）すっかりフルパワーである

そして何故か七村が右腕に泣きながら抱きついている

（5分前）

「すいません、すいません」

七村は何度も頭を下げた

「良いつて、別に痛いだけで感電はしないし、むしろ体力は回復するんだ♪」

「先輩、その話し方怖いんですけど」

「ところでなんで俺のときだけ作動したのかな？」

七村が言うところの『怖い話し方』で会話を続ける

「さあ、心あたりが……あっ」

「うん？」

作り笑いをすると七村は一步後ずさった

「コレですよコレ」

七村はポケットから銀色の光沢を放つバッジのようなものを取り出す

「トラップの前には動きを感知するセンサーとコレの信号を感知するセンサーがあつて動きだけ感知すると作動仕組みなんです」

「俺のは？」

「忘れた……かも知れないです」

「いいよ、俺根に持つタイプじゃないし」

「先輩、脅しにしか聞こえないです」

「んじゃ七村さん、あからさまにトラップ臭がプンプンするこの大きなコイルはいったい何なのですか？」

通路の両脇にあるそれを指差し無邪気な少年のような明るい声で言う

「電気系のトラップです、あと、今までの気絶させるレベルのものですがこれは即死レベルだったはず先輩その話し方怖いです」

「電気系か・・・」

声を元のトーンに戻す

「あの先輩、私の・・・使ってください」

七村がバッチを差し出す

「ああ、大丈夫、不意打ちじゃなければ・・・放電して危ないから先に通っちゃっていいよ」

「先輩が大丈夫でも私の気持ちか・・・うつ」

待て待て待て待て、なぜ泣き出した

何？感情の波が激しいのこの娘

しかも、使えなかったって七村が即死レベルって言ったじゃないか

「それって、二人同時に使えないのか？」

「無理ですよ、心臓の動きから血流の流れまで同じにしない限り・・・」

何でセンサーごときがトンデモ性能なんだよ

「先輩、私に構わず先に行ってください」

「死亡フラグ立ててないでとっとと行け」

バッジをポケットに入れてやり強く押す

「ひっ！」

あーもう、女子は分からん

「良いから、俺が無傷で通るのをそこで目に焼き付けとけ」

両手を広げながら慎重に一步ずつ歩き出す

4〜5歩ほど歩いた所でセンサーに引っ掛かって電撃が襲い来る

だが、どうということはない

両手で盾を展開する

盾は電撃を浴びて大きさを増していく

その間にも一步、また一步と茂木は歩く

そして、七村の所までたどり着いた

巨大化した盾を取り込みホッと息をつく

だがその時、七村が俺の右腕に抱き付いた

「あの、七村さん？」

胸とかめっちゃ当たってるんですけど

「だって、先輩が死んだら私どうしようかと・・・」

まったく、昨日と別人すぎて扱いに困る

そんな俺に構いもせず七村は暫く泣き続けた

こうして現在に至る

メンタル面はボロボロだ

だが、まだ終わってはくれなかった

「あ・・・・・・・・・・・・・・・・」

ドアから出てきた零奈さんと鉢合わせしてしまうとは

「いや、違うんです零奈さん誤解ですッ」

「いや大丈夫ですよ、大体察しはついてるので」

零奈さんは呆れた顔で笑顔を作っていた

「零奈ああああ」

七村は俺の腕から離れ零奈さんの方へ行く

「やっぱり美咲またやっちゃったか・・・」

七村は零奈さんに抱きついてワンワンと泣いている（身長差があるので無理はあるが）

「先輩、美咲は私が引き受けますから・・・」

スッとドアの前から退く

行けと言うことらしい

それはそれで人見知りの私にはかなり不安が残るのだが

念のためドアからバチバチ来ないか警戒する、決して静電気の事ではない

「おしっ」

ドアノブをひねりドアを引いて入室する

部屋にはホワイトボードが奥の壁に一つ取り付けられ長机とパイプ椅子がデジタル表記の0の様に中央に空間を明けて並んでいた

壁は一面コンクリートで壁紙などは貼られていない

そこにいる人達は髪の色はもちろん、来ている服も全員が『制服』を着用しているだけで統一感はなかった

「トラップは全部作動・・・と」

「随分と電気代取らせるわね〜新入り君？暫く自家発電してもらおうかしら？」

一人の女性が真っ先に歩み寄る

Tシャツの上に制服と思われるブレザーを羽織った少女だが漂う雰囲気は年上を思わせた

因みに髪の色はマゼンダ

「わざとあの娘にID忘れさせたのに結局、最後までトラップを自力で掻い潜るとはね〜」

ジロジロ顔を観察するように下から覗き込まれ茂木は顔をそらす

「因みに、センサーだけど、かなり密着すれば3人くらいまでは同時使用できちゃうのよ？」

「照れちゃってそこまで頭が回らなかったかしら〜？」

まあ、結果的に密着はしたが・・・なんて口が裂けても言えない

「ちょっと〜、だんまりされたら困っちゃうじゃないの」

「すみません・・・」

茂木の反応にが気に食わなかったのか、女性はムスツとした顔になる

「まあいいわ、私は如月惣きつらぎっていうの、結構レアな名字でしょ？」

「そうですね」

「緊張すんのも分かるけどさ？もっと楽に行かないと？」

如月さんは俺の首をがっちりホールドし酔っぱらいの如く絡む

「因みに私、このリーダーだからあまり逆らわないようにね？」

近いんですけど

「ダメだよ惣さんからかつちゃ、先輩困ってるじゃないですか」

ドアが開き零奈さんと七村（半べそ）が入室する

「良いじゃない、スキンシップよスキンシップ！！」

「惣さんのスキンシップは激しすぎるんですッ！！ってか、何で先輩とスキンシップする必要があるんですか！？」

零奈さんが如月さんを必死に放そうとグイグイ引っ張る

「やだぁ零奈ちゃんってば妬いてる？」

「そうやってからかうのやめてください」

「分かったわよ、ホラ」

如月さんは手を離す

離す？

手を離す↓力の均衡が破れる↓零奈さん方向に倒れる↓ラッキースケベ

それは不味いッ

この方程式が完成した瞬間に落下運動は始まっている

零奈さんは尻餅をつくだけ俺もちと転ぶだけ

バラバラに起きたら何の問題もないけどこうして起きるとなると話は別だ

右足で床を強く踏み電流を流す

そして流した電流を二人を支えるように壁に変換する

俺は勢いを加速させてしまったので顔面を強打したが零奈さんは無事だったようだ

「なるほどおゝこういう能力なのねゝ」

如月さんは俺の出した壁をちょんちょんと突く

「なかなか汎用性の高そうな能力ね、さすが電気系最強と言われるだけのことはあるわ」

普通、それは誉め言葉だが茂木は違った

「そんなんじゃないですよ・・・俺は・・・」

「謙遜するのも分かるけど監理局のデータベースにもそう書いてあったし一人で雑兵を2機落としたあなたの実力を私たちは買っているのよ?」

「今回、あなたを仲間に取り入れたのもその理由だよ」

「謙遜じゃあないです。ただ、相性の問題なんですよ」

そう、相性だ。

言っちゃ悪いが確かに全電気系の能力者で戦争しても生き残るのは俺だろう

だが、それは俺が『電気を固める』というオマケ能力を持っているからであって俺が強いからじゃない

「普通の電気系能力者が『グー』なら俺は『パー』なだけで」

それに、俺はその普通の電気系能力者なら持っているものを持っている
いない

「『紙』を突き破る『石』なんてたくさんいますよ」

場の空気が凍った

俺と会話していたのは如月さんだけだが他の連中だって聞き耳は立
てていたはずだ

第一印象って最悪なんだろうな俺って

「ごめんなさい、気を悪くしたかしら」

「いえ、いいんです」

「こんな事言っても何にもならないけど、別にそれだけの理由であなを仲間にした訳ではないわ、だから変なプレッシャー背負い込むこともないわ」

「というと？」

励ましの言葉よりに対する感謝よりも疑問のほうが勝る

俺の悪い癖だ

「それは追々話すわ。だからまずは、新入生の仕事をしてきてちょうだい？」

如月さんは親指で自分の後ろのホワイトボードのを指す

それが何を意味するのも分かった

俺は決意を新たにホワイトボードへ向かった

12話 正式入団（後書き）

お久しぶりです

更新が遅くなって本当に申し訳ないです（汗）

夏によくパソコンが復活したので積んでいたゲームやらアニメやらを消化していたらもう秋・・・

これからはペースも上げるようにがんばりたいと思います

誤字脱字多いかと思いますがこれからも応援してくれたらうれしいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0116r/>

壁一枚の防衛線

2011年11月16日03時15分発行